

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 『和名類聚抄』所収語注記「俗」の用法について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2025-07-25 キーワード (Ja): 古辞書, "俗", 平安時代 キーワード (En): old Japanese dictionary, "Zoku: 俗", Heian period 作成者: 萩原, 義雄 メールアドレス: 所属: 駒澤大学名誉教授
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/0002000524">https://doi.org/10.15084/0002000524</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



## 『和名類聚抄』所収語注記「俗」の用法について

駒澤大学名誉教授／国立国語研究所共同研究員

萩原義雄

### 要旨

『倭名類聚抄』（以下、「和名抄」と記述）の用字法として、「俗」字について調査を試みることにした。先ず、「俗」の語は大陸中国の漢籍仏典の注解資料などにその記載を見る語であり、此を典拠引用する邦人研究者は、此の「俗」字を「世俗字」「通俗字」として活用するようになり、古辞書に於ける真字注解などに広く見られることは、多くの先行研究者の報告に拠つて明らかにされてきている。茲で、改めて平安朝時代の源順が編纂した『和名抄』に用いられている「俗」字について、標記語毎に於ける語注記内容を以て稽査することと、その伝本系統の流れを見定めていくことにした。実際、十巻本データ（馬淵和夫影印諸写本（風間書房刊）、狩谷楳齋『倭名類聚抄訂本』（内閣文庫蔵））と廿巻本データ（那波道圓編纂元和版、古写本類）とをもって「俗」字の全貌を具さに検索し、各々の標記語に併せて対校表を用意した。各々の標記語における系統性を見据えておくことも重要な手がかりを求めていく上で、必要不可欠なものと考え、主なる語については現存する諸本を以て稽査し、その語例を定義づけていく上で、「字類抄」系古辞書や「名義抄」系の古辞書などの後世の本邦古辞書を活用して語毎に別稿として報告書をその都度公開してきている。此の報告結果が古辞書運用の一手法になればと考えている。

キーワード：古辞書、「俗」、平安時代

### 一はじめに

『倭名類聚抄』（以下、「和名抄」と記述）の用字法として、「俗」を用いる語注記（「俗用」「俗呼」「俗云」「俗説」）について調査を試みることにした。先ず、「俗」の語は大陸中国の漢籍仏典の注解資料などにその記載を見る語であり、此を典拠引用する邦人研究者は、此の「俗」字を「世俗字」「通俗字」として活用するようになり、古辞書に於ける真字注解などに広く見られることは、多くの先行研究者の報告に拠つて明らかにされてきている。茲で、改めて平安朝時代の源順が編纂した『和名抄』に用いられている「俗」字について、標記語毎に於ける語注記内容を以て稽査することと、その伝本系統の流れを見定めていくことにした。実際、十巻本データ（馬淵和夫影印諸写本（風間書房刊）、狩谷楳齋『倭名類聚抄訂本』（内閣文庫蔵））と廿巻本データ（那波道圓編纂元和版、古写本類）とをもって「俗」字の全貌を具さに検索し、各々の標記語に併せて対校表を作り、標記語毎に於ける語注記内容を以て稽査することで、その伝本系統の流れを見極めていくことを試みた。

### 二「俗用」の標記語

「俗用之」と注せられた『和名抄』に於ける事項の検討については、稿末の表1に一覧したように廿巻本の五六語と十巻本

の五三語（総数六一語）を確認する。このなかで、語そのものについてこれまでに筆者が詳細検証した標記語については、文字を太字にし、右傍線は廿卷本のみの標記語、左傍線は十卷本のみの標記語を記載した。

「俗用」に続く「〇〇」の語は、以下の七種の形式が見て取れる。

(1) 通常の用法ともいう「俗用」下位部に示す漢語名の字

(一) 单漢字⋮「的」「揭」「撥」「辻」「廷」「髮」「棟」「鍾」

「耄」「鵠」「鮭」「鼈」「𧈧」「蟻・𧈧」「楫」

(二) 二字熟語⋮「垂髪」「刀自」「東人」「甘葛」「倭琴」「格子」「麻布」「脂綿」「手洗」「旅籠」「歩障」「檜曾」「懸釜」「莖立」「干鳥」「象目」「味噌」「熟瓜」「芋柄」「和布」「荒布」「搗布」「青苔」「甘苔」「紫苔」「布苔」「心太」「芥子」「大根」「海老」「小竹」「黒柿」

(三) 三字熟語⋮「挿頭花」「高瀬舟」「平田舎」「手作布」「唐櫛匣」

(2) 他語例を下位部に示す

(四) 「筒」字の「去聲」

(五) 「胡瓜」の真字体漢字「木宇利／岐宇利」、「夏蟲」の「奈豆無之／奈都牟之」

(六) 「老海鼠」の「此保夜二字／此注二字」

(七) 「之」の標記字「校倉」（標「倉廩」）、「紅花」（標「紅藍」）、「海松」

以上の「俗用」による下位部の語を確認することができる。

此の二系統の『和名抄』を対校してみたことで、「俗用」の用字から得られた結果としては、両系統が共に「俗用」を用いて合致する語例が総数六一語中四九例（八〇%）と一致度が高いことが判る。標記語とその語注記内容に於ける構成の字排列についても考慮しておかねばなるまいが、斯うしたなかで、十卷本にあって、廿卷本にない語⋮①「負」②「邊鄙」③「青木香」④「檜楚」⑤「籠」⑥「海松」⑦「千歳藁」⑧「篠」〔八語〕

十卷本になくて、廿卷本にある語⋮⑨「倉廩」⑩「簷子」⑪「胡瓜」⑫「夏蟲」〔四語〕

といった内訳となる。異なりの要因については、語注記の記載一覧のなかで、右に示した一二語が個々の特異性を有しているのであれば、その観点から稽査することが必要となつてくる。

今、(1)から(12)の番号で、各々の特異性について別稿にまとめて後日公表することにしたい。

### 三 「俗用」下位部漢語单漢字の実例「鮭」

別稿として、「さけ」〔鮭〕—「和名抄」から『倭名類聚鈔箋注』へ」をPDF版で提供している<sup>(2)</sup>。いま、梗概記述として茲に示す。

慶安元年版『倭名類聚抄』と後刷り貞享版も同じ。  
 鮭  
 サケ  
 崔・禹・錫・食・經・云・鮭・ハ  
 今・按・俗・用・鮭・ノ・字・ヲ・非・也  
 鮭・音・圭・鰐・鮭・  
 魚・ノ・一・名・也・其・ノ・子・似・タリ・レ・莓・ニ・音・茂・今・案・莓・子・ハ・即

覆一盆一也見タリ唐一韻ニ一赤一光一一名ハ年一魚春一一生ノ  
年一中ニ死ス故ニ名ク之

する漢字とみておきたい。

※茲で、標記語を十巻本が「鮓魚」とするのに対し、廿巻本が「魚」字を取り、単に「鮓」としたこと、注記の「崔禹食經」に対し、「崔禹錫食經」と「錫」字を添えたこととの差異が両本に於ける特徴となる。源順にとつて標記語をより日本語として見るとき、下位部「魚」字を必要としなかつたということになる。と同時に、和名「さけ」に、別標記語「鰯・鰯・魚」を用いて、字形相似の「鮓」と「鮓」とを解説する点にも注目したい。「鮓」字を世俗では「さけ」と訓んでいることに「俗用」として注意喚起する。

実際、源順は、「俗用」を『和名抄』中に、廿巻本五七例／十巻本五三例を記載している。その内訳については、前掲『和名抄』所載「俗用」語（表1）のようになっている。「俗用□字非也」の字注形式が見えていて、此れと同じ注記形式を有する標記字としては、「鼈」字と「杉」字に於ける「相」の字にも用いられている。右に示した慶安元年版では、「俗」字を用いるは非なり「也」とこの註記部文を訓読している。逆に、肯定の「是なり〈也〉」についても、標記字「比楚」、そして、下位に「是」の字だけで、補助関連データ（Excel版データ）の「俗用」二本対校一覧に示した標記語「歩障」の語などに見えている。

※「鮓」の旁字「圭」は、「王」「主」そして、「生」の字に字形相似するところから、魚扁「鮓」「鮓」共々、この標記語「鮓」の字については、「分毫字樣<sup>(3)</sup>」の語例には未収載の文字ではあるがために、その体裁を有

#### 四 標記「今呼」と「俗呼」の標記語例「專」

標記語「專」の注記中の「古語也」のあとに「今呼」と「俗呼」と異なるた用法で下位「老女」へと導いている。茲で「俗」と「今」とでは時間軸を以て見ていくとき、その語意差が当然見られるであろうし、此を源順と云う一人の編者によることば選びのなかで唯一大きく変改させた語注記となっている。次にその語例を示す。

※標記語・注記文はそのままとし、注記割注の箇所については、その箇所を「」印で示した。当該語「俗呼」の箇所には開み印で示した。

以下これに从う。

#### 〔翻刻〕

十巻本『和名類聚抄』注文

專　日本紀私記云專領「多宇米乎佐米」今案俗呼老女為專故繼於貢耳

茶茗　余雅集注云茶「宅加反字亦作櫟」小樹似支子其葉可煮爲飲今呼早採爲茶晚採爲茗「音酩」茗一名旃「音喘」風土記云旃者茗老葉名也

廿巻本『倭名類聚抄』注文

專　日本紀云專領二字讀「太宇米乎佐米」今案專訓「毛波良」專一之義也太宇女者毛波良之古語也今呼老女爲太宇女故

次於貢耳

茶茗 爾雅集注云茶「宅加反字亦作様」小樹似支子其葉可煮爲飲今呼早採爲茶晚採爲茗「音酩」茗一名苒「音喘」風土記云苒者茗老葉名也

【訓読】

専 『日本紀私記』に「専領センレウ」二字を讀む。〔多〕宇米乎佐女セイメ、今案ふるに俗に「老女ラウジヨ」を呼びて「専」に為る。

故に「負フたうめ」に繼ぐまくのみ」と云ふ。

専 『日本紀』に「専領センレウ」二字を讀む。〔太〕宇米乎佐米セイツ、今案ふるに、「専」の訓み「毛波良モツハラ」専一の「之」古語義なり「也」。〔太宇女〕は「者」タウメ「毛波良」の「之」古語なり「也」。〔今〕老女ラウジヨを呼びて「太宇女」に為る。故に、「負フたうめ」に次ぐまくのみ」と云ふ。

茶茗 『爾雅集注』に云はく、「茶」「宅加」の反、字は亦、「様」に作く」は小さき樹にして「支子」に似て、其の葉、煮て飲むと為べし、今、早採りを呼びて「茶」と為し、晚採りを「茗」「音は酩」と為す、「茗」は「名に「舜」音は「喘」」といふ。『風土記』に云はく、「舜」は「茗」の老葉の名なりといふ。

※茲に取り上げた標記字「専」の語では、十巻本は「俗呼」と注記するところを廿巻本では、「今呼」と記載する。漢語「老女」の和語「太宇女」における時間軸でいう異語選択による変改に注目せねばなるまい。「一呼」の上位語で「俗」と「今」とでは異なる記載な

のだが、十巻本にも他の標記語に注記「今呼」を用いる標記語「茶銘」の語例があり、此の標記語「茶銘」では、引用『爾雅翼』に於ける、○揖雜字云茗之別名也疏櫻一名苦茶郭云樹小似梔子冬生葉可煮作羹飲今呼早采者爲茶晚采者爲茗一名舜蜀人名之苦荼のなかで用いていた「今呼」の語文をそのまま引いたに過ぎない。此を十巻本と廿巻本が共通継承するのは当然のことと言える。

これに対し、標記語「専」が語注記のあたまに、本邦資料『日本紀私記』〔十巻本〕、『日本紀』〔廿巻本〕の書名を引用し、資料名を異にしつつ熟語「専領」の語を所載し、真字体漢字表記（＝万葉仮名）の「多宇米乎佐米」と「太宇女乎佐女」を以て和名「たうめをさめ」の語を所載する。そして、単字標記語「専」について説くという他語とは稍異なる形態をとつており、語注記の用字も「今案俗呼」「十巻本」、「今案專訓」〔廿巻本〕とし、増補注記「（和名）毛波良（林道春は「モツハラ」と朱訓読）する」を、「専一の「之」義なり「也」。〔太宇女〕は「者」毛波良の「之」古語なり「也」」の文言を増補する。「今、老女ラウジヨ」を「専」／「太宇女」に為り呼ぶ、故に、「負」に「於」次ぐまくのみ「耳」（私意に訓読）を茲に置く。十巻本がそのまま「専」とするのに對し、廿巻本では和名「太宇女」と和語に和らげて表現する。其の上で引用した本邦の文献資料の原書『日本書紀』とその注釋書『日本紀私記』（＝矢田部宿祢公望撰『田氏私記』）の引用書名の相異を見据えて考察を試みておくと、

編者源順がどちらの書物を先後としているのかによつて取扱いが変わるのでと推定し、此の標記語「専」の語注記を先に原本『日本書紀』に求めてみた。

その結果、「専」字一六例、「領」字六三例を検索し得た。此のなかで、両語に共通する卷が卷七の景行紀に認められ、連続する「専領」の語例として、

○故汝カタクメヨ領ニ東ノ國ヲ一熱田本二二、一〇八頁5

【訓読】故、汝専東國を領めよ」とのたまふ。

を得る。同じく、狩谷棟齋『倭名類聚鈔箋注』も景行紀を既に

挙げている。では、『日本紀私記』(=『田氏家集』)についてはどうなつていて、景行紀に該当する語例は見出せない。

此のなかで卷十の應神紀に「専使」の語例が見えていて、次に掲げておく。

『日本紀私記』卷下(早稻田大学図書館蔵)

太宇女豆加比／専使 ※茲での「」印は改行を示す。

といつた記載を見る。此の語例を以て、熱田本『日本書紀』卷十應神紀に、「天皇遣タウメツカヒ専使」(二〇三頁5)(小学館日本古典全集)は、「専使」と訓むのだが、「もはら」の語訓は当に時代に見合つた平安朝期に誕生した新訓と言える。茲は大系本に倣うことが穩当ということになろう)を載せる。この語を引用する用語「今呼」を両系統共に用いていることもあり、編者源順自身が「今呼」の用語を用いているのは纔か一例なのだが、

【箋】「高麗笛」除吹處而六孔之笛也

「今」という時間軸での記述式に用いていたことも少しく検討するとき、現代の吾人達も「いま【今】」という時間軸に基づく記述式の注記には、「今案」の用語も両系共に最も多く用いられていて、延べ語数三九一語のうち両系共に用いているのが二三八語(六一%)となつていて、

廿卷本に「今案」有、十卷本無は、六一語  
廿卷本に「今案」無、十卷本有は、九二語

となる。茲ではこれ以上は述べずに置くが、此の用語についても改めて語解析する余地が残されている。

## 五 語注記「俗云」について

また、「俗用」とせずに「俗云」とする語例総数一九〇語(廿卷本一七九語、十卷本一五四語)についても同様の稽査を行つておいた。実際、十卷本で「俗用」を用いているところに、廿卷本では「俗云」と記載する標記語が(1)「青木香」(2)「夏蟲」(3)「胡瓜」に見え、逆に、廿卷本に「俗用」を用いているのに未記載とする標記語(4)「倉廩」(5)「籬子」(6)「籠」(7)「篠」二字標記語(8)「檜楚」などの語は「用」と記載する。「式文同用」とする標記語としては、(9)「海松」(10)「千歳藁」で「此間」の語が見えていて、此の語注記における差異については更に考察しておくと、十卷本で未記載とする文言が廿卷本においては記載されている点は見逃せない。

【竹】四聲字苑<sub>云竹</sub>「陟六反和名多計」草也「云非草非木

兼名苑注<sub>云筠</sub>「王磨反」竹揔名也「孫恤

切韻」曰「云篁「音

皇「和名」太加无良俗云「竹叢」<sub>藁也</sub>

※十巻本における標記語「竹」（卷十草木下竹類）と「篁」（卷十草木下竹具）と各々別立てにして記載し、二語に排列するのを廿巻本ではひとつに統括するものとなつてゐる。分離なのか、統括なのかの議論も当然ありとあらゆる角度から精査することも必要とせねばなるまいが、編纂次第の流れから捉えたとき、やはり分離語を統括語化するという方向性については是とする立場にある。

四声字苑<sub>云竹</sub>「陟六反」「多介」草也「云非草非木兼名

苑注<sub>云筠</sub>「王磨反」竹揔名也「十巻本」

四聲字苑<sub>云竹</sub>「陟六反」「和名」「多計」草也「云非草非木兼名

苑注<sub>云筠</sub>「王磨反」竹揔名也「廿巻本」

※万葉仮名表記の字母「介」と「計」については、実際『和名抄』全

体での使用数は、十巻本「介」九五語「計」一四語総数一〇九語、廿巻本「介」一四一語（うち、職官・国郡部四一語）・「計」一七語（う

ち国郡部四例）総数一五八語の使用語数となつてゐる。

そのあと標記語「篁」の語注記内容についても見定めでおくと、典拠名を十巻本が「孫恤云」に対し、廿巻本は標記語「竹」の語注記では「和名」の用語を増補し、「篁」の語注記には「孫恤、切韻」と「切韻」の書名が増補されてゐる。

此れ等のことから、廿巻本が後に増補した可能性がより高くなるといふ見方に近づいたと見てゐる。

## 六 二系統本対校表にみる「俗云」の語

「俗云」の用語は、総数一五八語で、十巻本一〇五語、廿巻本二三五語となつてゐる。その内訳は、「俗云」の下位語に真字体漢字表記（＝万葉仮名）が一七四語で、十巻本が欠語とする標記語が五七語、此れに対し、廿巻本が欠語とするのは一七語と少ない。その詳細を先ず論じる。そのあとに、特徴となる語、数例について述べる。

### 六一 「俗云」を記載する語

#### (1) 両本記載が共通する語〔一七四語〕

(以下、補助関連データ（Excel版データ）におけるA列「通番」の数字を添えて示す。)

- 24 「霈」 49 「峽」 145 「流黃」 187 「稻魂」 188 「幸魂」
- 256 「遊女」<sub>〔夜發附〕</sub> 342 「顱」<sub>〔髑髏附〕</sub> 375 「湧」<sub>〔拂字附〕</sub> 388 「吭」 408 「臍臍」 415 「臍」<sub>〔臍片附〕</sub> 454 「指」
- 465 「膝剝」 470 「踝」 471 「踵」 477 「陰囊」 478 「陰核」
- 481 「月水」 491 「清盲」 492 「近目」 496 「雀盲」 501 「兔缺」
- 524 「脚氣」 525 「痿痺」 526 「轉筋」 533 「蛇蟲」
- 535 「痔」 538 「癰」 542 「產後腹」 543 「陰頬」 546 「癩狂」
- 548 「醜酒」 549 「瘡瘍」 551 「霍亂」 552 「口」<sub>〔口+虎+口〕</sub> 「病」
- 559 「疽」 561 「瘰疽」 562 「乳癰」 565 「浸淫瘡」
- 567 「癰瘍」 570 「附贅」 574 「癰」 577 「疖」
- 607 「馳射」 608 「照射」<sub>〔蹤血附〕</sub> 630 「双六」 641 「拍

- 浮」 643「基底」 654「鉦鼓」 655「方磬」 658「大鼓〔枹附〕」 659「揩鼓」 662「腰鼓」 666「箏〔柱附〕」 674「笙〔匏簫附〕」 675「簫簾」 680「莫牟」 6279「殿〔名附主〕」 6367「邸家」 6368「店家」 6407「壇」 6432「枢」 6440「閥木」 6445「櫛」 6446「闕」 6481「舟事類」 6510「長簷車」 6512「福車」 6523「轂」 6530「車簾」 6535「轔挺」 6553「連錢駒」 6558「驃〔炎附〕」 6567「驃馬〔踏雪馬附〕」 6570「驃〔髦附〕」 6571「鼻梁」 6574「排鞍肉」 6575「脊梁」 6576「承鎧肉」 6579「歴草」 6581「鳥頭」 6584「愈脈」 6586「嘶〔鬻附〕」 6588「蹄蹠」 6589「脊瘡」 6591「腿病」 6592「腹轉病」 6615「瑠璃」 6622「鑰石」 6648「田香」 6873「炬火」 6875「烽燧〔火燄附〕」 6913「虫」 6924「雲冠」 6932「纓」 6948「裘」 6962「欄」 6990「采鞋」 6998「草履」 7008「擦」 7013「簫簾」 7020「浴桶」 7025「鍾」 7036「111鉢」 7040「鉢」 7044「111衣匣」 7047「袈裟」 7049「衲」 7057「襪人」 7059「緹錢」 7060「神籬」 7070「瑞籬」 7085「畫案」 7090「版位」 7115「箭」 7151「笏」 7171「斗〔斗概附〕」 7182「豆粉」 7185「黑棗」 7187「鑷子」 7194「中箱」 7208「苞苴」 7214「剪刀」 7255「簾」 7266「帳〔几帳附〕」 7299「簾」 7302「行纏〔■〔# + 囂〕附〕」 7313「香輿」 7314「火輿」 7317「門燎」 7322「鞍轡」 7324「轡〔轔附〕」 7328「杏葉」 7338「金鏤」 7339「尾韁」 7340「鐸」 7342「轡」 7343「111字附」 7571「鶴子」 7584「乳麪」 7586「蜜」 7592「承鞚」 7355「鞭」 7399「轆轤」 7467「鐵牛」 7472「鈔籬」 7474「金椀」 7488「鞞」 7513「跔」 7532「醜〔醜字附〕」 7542「漿」 7554「餳」 7559「餳餅」 7568「飼餅」 7570「驛驪」 7598「驪」 7602「炒饅」 7614「饅」 7627「生薑」 7641「穧」 7677「薰蘆」 7818「眾」 7823「孔雀」 7888「鸕鷀」 7901「眾〔翥字附〕」 7906「翹」 7962「鼯鼠」 7989「魚」 8004「王餘魚」 8046「鰐」 8048「鱠」 8052「鰐」 8100「甲」 8149「寒蜩」 8379「二〔# + 卄〕莢」 8391「竹〔簾附〕」 8439「櫻柵」 8473「石楠草」

## (2)十卷本欠語〔五七語〕

### A 標記語が欠〔九語〕

- 229「相工」 232「陶者」 236「裨販」 735「平調曲」 752「道調曲」 868「史生」 886「局〔校書殿附出〕」 6566「駿馬」 8405「両節間」
- B 標記語・注記語はあるが、「俗〔云〕」の語が欠〔四五語〕**
- 276「父・母」 290「母兄」 392「簪」 663「拍子」 667「琵琶〔撥附〕」 670「簫簾」 671「箜篌」 6281「堂〔名附出〕」 6363「厨」 6385「懸魚」 6393「天井」 6578「汗溝」 6580「屁株」 6590「腹腫」 6593「蠶」 6633「青木香」 6902「縲」 7028「匱」 7029「火舍」 7091「率」 7164「塵尾」 7493「碓〔程附〕」 7509「餳」 7512「粢」 7555「餅

「黄菜」 7652 「糰米」 7692 「鸕實」 7720 「栗刺」 [鱗發附]  
 7730 「搘瓜」 7739 「薯蕷／山芋」 7821 「蕷尾」 7822 「鳳凰」  
 7921 「痴」 7924 「遊牝」 8152 「夏蟲」 8206 「菊」 8208 「紫

宛」 8214 「金錢花」 8216 「蒼草」 8406 「梅檀」 8409 「蘇枋」  
 ○標記語・注記語はあつて、注記に異同の「俗[云]」の語が

欠〔11語〕  
 176 「電公」 [電等附] 231 「鍛冶」 7828 「鷺」

### (3) 千巻本欠語 [11七語]

A 「俗[云]」 + 万葉仮名 [11語] (ハウ「\*廿」印の1語は千巻本のみ未所載。以ト同じ)]

201 「天探女」 252 「涉人／渡子」 461 「腕」 495 「田翳」  
 500 「屹」 596 「驥」 6370 「庵室」 6626 「裏衣香」 7816  
 「鶩鳥」 [鶩字附] 7847 「獨子鳥」 7732 「茄子」 [醜字附]」  
 \*廿〔高麗笛〕

B 「俗[云]」 + 字音注 [七語]

6914 「紗」 7100 「綠青」 7101 「雌黃」 7286 「圓座」 7711

「枇杷」 8346 「葫蘆」 \*廿〔(行宦)〕

C 「俗[云]」 + 差声語 [11語]

560 「簾」 673 「簾」

D 「俗[云]」 + 意義注 [六語]

476 「玉蕊」 7206 「粧」 7320 「鞍」 7469 「鎗」 7491 「繫」

7698 「冬桃」

※差異17語は、上記の体裁から成る。此れを以て、標記語と語注記について些少なりとも次に語解析しておくるにす。

### 六—II 「俗[云]」 を記載する特徴ある語

#### (1) 「俗[云]」 の下位部を標記語 + 万葉仮名の五語

(上位部に千巻本、下位部に千巻本を記載し、その境界部の符号に「＼」印を以て示した。以下此れに从つ。

各語には、補助関連データ（Excel版データ）におけるA列「通番」の数字を添えて示した。また、あわせて、六—I節における区分(1)、(2) A～C、(3) A～D)を添えたものある。)

(2) A 236 「裨販」 ×／販婦「比佐岐女」 [裨販也]

(3) B 7286 「圓座」 [圓座] 因座一云和良布太] 圓草褥也

圓座一云和良布太] 圓草褥也

※千巻本は「此間[云]」として下位語注記を記載する。両本とも「[云]」を挿む。千巻本が当該語を「俗[云]」から「此間[云]」に源順自身が仕立て直した事由は一体、何かを今後解き明かす必要がある。また、以ほつた二つの用語を明確に使い分ける意識を備えていたことを明かにする必要があろう。

(2) B 7652 「糰米」 [糰米] 夜歧古女糠之處上声 烧稻爲米

也／燒米夜木古女可用糰米二字 烧稻爲米也

(1) 608 【照射】 壬毛之「蹤血」 波加利／止毛之「蹤血」

波加利]

- (2) A 868 [史生] × / 医 「久須之」 博士 「波加世」 諸師  
「於保由美乃之」
- ※十巻本には、236～868の標記語は未記載となつてゐる。他に229「相  
公」232「陶者」235「平調曲」252「道調曲」886「局」6566「駿馬」、  
8405「兩節間」(番号は廿巻本の通番で表示)の語、計九語がある。
- 注記文言はあるが、231「鍛冶」～7828「鷹」の一語は注文言に「俗  
[K]」の用語を未記載にする。
- (2) 「字音+万葉仮名」乃至「万葉仮名+字音」の九語
- (1) 145 [流黃] 「石流黃」[由王] 焼石液也 / [由王] 燔石液也
- (1) 574 [癬] 「癬」 音浅俗云 [錢加佐] / 音淺俗云 [錢加佐]
- (1) 674 [笙] 「笙」 音生俗云 [象乃布江] / 音生俗云 [象] 乃布  
江
- (1) 6440 [閥木] 「閥木」 [貫乃木] 以横木持門曰閥所以閑也  
／一閑也
- (2) B 7739 [薯蕷] 「山芋」 夜万乃伊毛 / 和名夜萬都以毛俗
- 云山乃以毛
- (1) 666 [箏] [象] 乃古度 / [象] 乃古止
- (1) 7008 [櫟] [心] 乃波之良 / [心] 乃波之良
- (1) 7313 [香輿] [香] 乃古之 / [香] 乃古之
- (2) B 7592 [黃菜] [王] 佐以 / [王] 佐以

- (3) 「俗[云] 下位を字音語の三八語
- (1) 559 [疽] 「七余反俗[云]去声」名 [發背] 久癰也 / 「七餘  
反俗[云] [發背] 久癰也」
- (3) C 560 [癰] 「於容反俗[云]去声」 氣壅結而不潰也 / 「於容  
反」 氣壅結而不潰也
- (1) 643 [棊] [碁] [局] 「渠玉反棊局俗[云] [五半]」 棋板枰也 / 「渠  
玉反棊局俗[云] [五半]」 棋板枰也
- (1) 654 [鉦鼓] 鉦鼓之聲 「鉦音征俗[云]常古」 / 鉦鼓之聲 「鉦  
音征鉦鼓俗[云]常古」
- (1) 655 [磬] 「苦定反俗[云] [方磬] 磬音強」 / 「苦定反方磬俗  
[云] [奉強]」
- (2) B 667 [琵琶] 「毗婆[一音] 本出於胡也 / 「毘婆[一音]俗[云]  
[微波][二音] 本出於胡也
- (2) B 670 [筆箋] 「今案筆字未詳」 / 「筆箋俗[云]空古今案筆  
字未詳」
- (2) B 671 [箏箋] 「空侯[一音]楊氏漢語抄[云]箏箋百濟琴也」 漢  
武時人依琴製之 / 「空侯[一音]俗[云]如江胡[二音]楊氏漢語抄  
云箏箋百濟國琴也和名久太良古止」 樂器也兼名苑注[云]箏箋  
漢武時人依琴製之
- ※「俗[云]」の用語は560「癰」では廿巻本に未記載にして、670「筆箋」  
は反対に十巻本で未記載にする。671「箏箋」も十巻本に未記載に  
するのに対し、廿巻本には「和名」以下の注記に万葉仮名表記の和訓、  
意味、典拠書名が増補される」とより補正がなされたものと言え

る。

(3) C 673 【簫】「音蕭俗云去声」編竹吹之長則濁短則清以蜜蠻實其底而增減則知之／「先堯反和名世宇乃布江」其形參差象鳳翼也

※引用書目が十巻本が『蔡邕月令章句』とし、廿巻本が『風俗通』として異なり、自ずとその注記引用内容も異なった記述となつている。「俗云」の用語は十巻本に記載をみる。

(2) A 735 【平調曲】×／宮商荊仙樂〔俗云荊仙樂〕

(2) A 752 【道調曲】×／散手破陣樂〔俗云散手〕

(3) B \*廿【行宮】「賀利羨夜今案俗云頓宮」／×

6279 【房】「音防俗云音望」旁也在室之兩方也／防反在室

之兩方也禁中房名

※廿巻本には「防反」で「俗云」を含む語注記の文言を未収載にする。

6363 【厨】「厨」×／庖丁俗云「抱長」一反倉厨也

(2) B 6385 【懸魚】「弁色立成云屋脊桁端懸板名也凡桁端有之」／「俗云如字辨色立成云屋脊桁端懸板名也凡桁端有之」

(2) B 6393 【天井】菱藻水中之物以厭火灾也／「俗云殿掌」

菱藻水中之物以壓火灾也

(1) 6523 【轂】「古祿反楊氏漢語抄云車乃古之歧俗云簡」輜所湊也／「古祿反漢語抄云車乃古之歧俗云簡」輜所湊也

※十巻本が書名『楊氏漢語抄』とするに廿巻本が『漢語抄』と略記する。

(1) 6622 【鑰石】鑰「他侯反字亦作鉅鑰石二音俗云中尺」石似金西域以銅鐵雜藥令爲之／鑰「他侯反字亦作鉅鑰石二音

俗云中尺」鑰石似金西域以銅鍊雜藥合爲之

(2) B 6633 【青木香】「俗用象目」出天竺是草根状似甘草／青木〔俗云象目〕出天竺是草根状似甘草

※十巻本は「俗用」と記載する。また、廿巻本注記「青木」と「香」字欠。

(1) 6648 【甲香】「俗云甲音合」螺屬也可合衆香燒之皆使益芳獨燒則臭／「俗云合講一音」螺屬也可合衆香燒之皆使益芳獨燒則臭

(2) B 6902 【綺】「虛彼反歧一云於利毛能又一訓加无波太」似錦而薄者也釋名云綺某也謂方丈如某也／「虛彼反」俗云岐一云於利毛能又一訓加無波太似錦而薄者也釋名云綺某也謂方丈如某也

※十巻本「俗云」の用語を未記載にする。

(3) B 6914 【紗】「所加反俗云射」似絹太輕薄也／「所加反俗云射」似絹太輕薄也

(2) B 7091 【筭】筭「蘓貫反俗音殘」長六寸以計曆數也／筭「蘇貫反俗云殘」長六寸以計曆數

7100 【縁青】一名碧青「綠青俗云祿省」／一名碧青「綠青俗音祿省」

(3) B 7101 【雌黃】「一名金液「雌黃俗云之王」山有金其精熏則生雌黃耳／一名金液「雌黃俗音之王」山有金其精薰則生雌黃耳

(1) 7399 【轆轤】「鹿盧二音俗云六路」圓轉木機也／「鹿盧

- 二音俗云六路 圓轉木機也
- (2) B 7822 【鳳凰】 雄曰鳳雌曰凰 「俸皇二音」 毛虫之長也/ 雄曰鳳 「音俸俗云豐」 凤 「音皇」 羽蟲之長也
- (1) 7823 【孔雀】 「俗云音宮尺」 毛端圓一寸者謂之珠毛々 文如畫此鳥或以音響相接或見雄則有子矣/ 「俗云宮尺」 毛端圓一寸者謂之珠毛文如畫此鳥或以音響相接或見雄則有子矣
- (1) 7906 【翹】 「渠遙反今案俗云翡翠是」 鳥尾上長毛也/ 「渠遙反今案俗云翡翠是」 鳥尾上長毛也
- (2) B 8406 【旃檀】 「仙壇二音此間云善短」 香木也內典云赤者謂之牛頭栴檀/ 「仙壇二音俗云善短」 香木也內典云赤者謂之牛頭栴檀
- (2) B 8409 【蘆枋】 「音方俗音湧方」 人用染色/ 「唐韻作放音與方同俗云須房」 人用染色者也
- (1) 8439 【櫻桐】 「忿固二音」 一名蒲葵說文云栴檀可以為葦【栴音并今案即櫻桐也俗云種路】/ 一名蒲葵 「櫻欄」 一音忽閭俗云種魯 說文云栴檀可以為索 「栴音并栴檀即櫻欄也」
- (2) A 7028 【匱】 俗音輪/ 俗云輪
- (2) B 7029 【火舍】 俗音化赭/ 俗云化赭
- (1) 7090 【版位】 俗云變為二音/ 俗云變為二音
- (1) 7314 【火輿】 今案俗云火輿是/ 今案俗云火輿是
- (1) 7317 【門燎】 力弔反俗云門火/ 一門火

(1) 6932 【纓】 於盈反俗云燕尾/ —— 燕尾

(1) 6962 【襴】 音蘭俗云如字/ —— 如字

このように、「俗云」の用語を見ておくと、両本系共に記載があるのは一一語に留まり、十卷本だけが記載するのが七語、廿卷本のみに記載があるのは一五語となっている。茲で、「俗云」の用語のなかで十卷本が「俗音」とした注記改編するのに対し、6914 【紗】 と 7101 【雌黃】 の二語だけが廿卷本に「俗言」を用いて逆の編纂指向の現象を示している。その逆として、廿卷本が「俗云」とする語例は、7091 【笮】、7164 【麁尾】、8409 【蘆枋】 の三語が見え、これに 7823 【孔雀】 の「俗云音」を「俗云」にする一語、「俗用」6633 【青木香】 の一語、「此間云」とする 8406 【旃檀】 の一語とがあって、「此間」と「俗云」との用語についての連関性を探らねばならないことも確かなことである。『和名抄』に於ける「此間」の用法については、既に永山勇（一九六三・三六四頁）、大友信一・江口泰生（一九八六）、宮澤俊雅（一九九四）「89番百廿七1【栴檀】 善短」（二九〇頁）としているのや、不破浩子（一九八八）資料の標記語「星」での記述や池田証壽（一九八八）などが既に指摘されてきている。此の近称指示の語「此間」について、宮澤俊雅（一九九四、二〇一〇）がこれまでの論を整理し、「(ハ)」「(ル)」の「(ル)」の本邦での語意識を述べる用語と認定したこともある。『和名抄』に於ける一つの導きを成し得ていて卓越した論と言えよう。その後に、単なる憶測と断つて持論から読み手を促す。

した、「源順は「此間<sub>云</sub>」を内親王を含めて「われわれの世界」としてとらえ、一方「俗」という時には内親王とは無関係に、自分を含めた「しもじもの世界」を表現したのではなかろうか。」〔宮澤俊雅（11010：110六頁）・傍線は筆者に拵る〕については、両系統本『和名抄』流布の流れを知るうえで重要なキーワードに近づいていたと吾人は見ている。その意味で、標記語「梅檀」の語は、十巻本が「此間<sub>云</sub>」と記載する箇所を廿巻本が「俗<sub>云</sub>」としている先後関係論の是非の扉を開く語例に位置づけておきたい。

また、江戸時代末の狩谷棟齋自身も、『倭名類聚鈔箋注』の巻十校讎草木部下にて指摘するも、その異同の事由についてまでの近現代の解明論には及んでいなかつたと言える。

## 七 「俗<sub>云</sub>」下位部真字体の万葉仮名表記一覧

### 七一

「俗<sub>云</sub>」の下位部で最も多いのが真字体の漢字表記（＝万葉仮名）の語例で、その総数は一八五語（内実数：十巻本一四八語、廿巻本一七五語）を見る。次に示す語の総数は一六九語とする。（万葉仮名表記の語例を記載するうえで、「×」印で一方が未記載を示し、「／」印で上部に十巻本と下部に廿巻本の万葉仮名を記載した。その表記の不分明な箇所や異同については、万葉仮名部分に傍線を付記した。）

### (1) 標記語、両系統が共通「八二語」

- |                              |                                   |
|------------------------------|-----------------------------------|
| 24【霈】「—／雨水」比布留               | 252【涉人】「—／渡子」和                    |
| 太之毛利                         | 408【臍臍】倍曾                         |
| 井佐良比                         | 415【臍【脣片附】】「—／尻」                  |
| 471【踵】「—／跟」歧比湧               | 477【陰囊】布久利                        |
| 篇乃古                          | 481【月水】佐波利                        |
| 【近日】智賀米                      | 491【清盲】阿岐之比                       |
| 度利女                          | 495【目翳】比                          |
| 蟲】加以又云阿久太                    | 496【雀盲】「雀盲／雀盲」                    |
| 500【吃】古度々毛利                  | 524【脚氣】阿之乃介                       |
| 533【蛻                        | 538【癆】之利於毛                        |
| 「—／產後腹痛」之利波良                 | 542【產後腹】                          |
| 曾比                           | 543【陰頬】「陰頬／治陰頬方」                  |
| 546【癲狂】「—／天狂」毛乃久流比           | 548【酗酒】「—／酒狂」佐加々理                 |
| 552【口】「 <sup>ノ</sup> +虎+巳」病】 | 552【口】「 <sup>ノ</sup> +虎+巳」病】「—／說文 |
| 云瘡                           | 561【瘰疽】倍宇                         |
| 曾                            | 562【乳癰】「—／疣」知布                    |
| 565【浸淫瘡】心羨佐宇                 | 565【浸淫瘡】心羨佐宇                      |
| 567【癰瘍】路                     | 570【附贅】「—／附贅懸疣」布湧倍                |
| 久路久佐                         | 577【疖】                            |
| 596【膿】宇羨古又云宇羨之留              | 630【双六】「—／六采」湧久呂久                 |
| 641【拍浮】於布湧                   | 658【大鼓】「抱附】                       |
| 「—／枹」豆々羨乃波知                  | 659【揩鼓】「—／揩鼓」湧利都々                 |
| 羨                            | 6446【闕】「—／闘」度之歧美                  |
| 6481【舟事類】「—／                 | 6481【舟事類】「—／                      |
| 艘                            | 6535【船艇】久 <sup>モ</sup> 於保比        |
| 爲流                           | 6567【驛馬】「踏雪馬                      |
| 附】                           | 6570【驛】「 <sup>モ</sup> 驛馬」         |
| 「—／驛】阿之布知                    | 6570【驛】「 <sup>モ</sup> 驛馬」         |
| 宇羨加羨                         | 6579【歷草】曾布歧                       |
| 6581【鳥頭】「—／曲肘】               | 6584【陰脈】「陰脈／陰脈」麻良佐夜               |
| 久波由歧                         | 6589【脊瘡】                          |

多胡 6591 【脚病】知阿榮歧 6615 【瑠璃】留利 6873 【炬火】太天阿加之 6875 【烽燧】〔火撾附〕「—＼火撾」保久之 6913 【帛】波久乃歧奴 6948 【裘】加波歧沼 6990 【糸鞋】之賀伊 6998 【草履】佐宇利 7020 【浴室】「—＼溫室」由夜 7040 【鉢】波智 7047 【袈裟】介佐 7049 【柄】「—＼納」能不 7060 【神籬】比保路歧 7070 【瑞籬】羨豆加歧 7085 【書案】不羨都久惠 7115 【箭】夜之利 7171 【斗】〔斗概附〕「—＼概」度加歧 7185 【黒蘭】波久路女 7187 【鑷子】「—＼鑷」計沼歧 7302 【行纏】〔＝〔# + 圈〕附〕「—＼脛巾」波々歧 7322 【鞍轡】宇波之岐 7340 【簾】久々美 7342 【轡】久都和 7343 【承轡】三都々歧 7513 【盤】毛比 7532 【醣】〔醣字附〕「—＼醣」〔醣〕糟米阿久 7542 【漿】迄於毛比 7559 【餚餉】「—＼餚餉」伏兔 7570 【餌餻】比知良 7571 【餓子】「—＼餓」音都以之 7586 【蜜】羨知 7592 【黃菜】王佐以 7598 【腰】加須毛美 7627 【生薑】阿奈波之加美 7641 【穧】比豆知 7711 【枇杷】味把 7732 【茄子】〔醣字附〕「—＼餓」餓恵久之 7888 【鶲鷺】「—＼鶲鷺」字 7924 【遊牝】由比

## (2) 漢字表記語 [一一語]

6932 【纓】燕尾 6962 【欄】如字 7013 【簾幕】空印 7028 【匱輪】7029 【火舍】化赭 7151 【笏】尺 7194 【巾箱】打乱匣 7314 【火輿】火輿 7317 【門燎】門火 7399 【轆轤】

六路 7906 【翹】翡翠 8046 【鰐】水集 8379 【=】〔# + 卍〕英】「—＼皂莢」鮒結  
鞋】之賀伊 6998 【草履】佐宇利 7020 【浴室】「—＼溫室」由夜 7040 【鉢】波智 7047 【袈裟】介佐 7049 【柄】「—＼納」能不 7060 【神籬】比保路歧 7070 【瑞籬】羨豆加歧 7085 【書案】不羨都久惠 7115 【箭】夜之利 7171 【斗】〔斗概附〕「—＼概」度加歧 7185 【黒蘭】波久路女 7187 【鑷子】「—＼鑷」計沼歧 7302 【行纏】〔＝〔# + 圈〕附〕「—＼脛巾」波々歧 7322 【鞍轡】宇波之岐 7340 【簾】久々美 7342 【轡】久都和 7343 【承轡】三都々歧 7513 【盤】毛比 7532 【醣】〔醣字附〕「—＼醣」〔醣〕糟米阿久 7542 【漿】迄於毛比 7559 【餚餉】「—＼餚餉」伏兔 7570 【餌餻】比知良 7571 【餓子】「—＼餓」音都以之 7586 【蜜】羨知 7592 【黃菜】王佐以 7598 【腰】加須毛美 7627 【生薑】阿奈波之加美 7641 【穧】比豆知 7711 【枇杷】味把 7732 【茄子】〔醣字附〕「—＼餓」餓恵久之 7888 【鶲鷺】「—＼鶲鷺」字 7924 【遊牝】由比

## (4) 十巻本が「俗[瓦]」を未記載 [一一五語]

〔注記語を有し、前に別語を置く〕〔一八語〕

176 【雷公】〔電等附〕 276 【父母】 290 【母兄】 392  
【醫】 6363 【厨】 6578 【汗溝】 6580 【尾株】 6590 【腹瘡】 6593 【蠶】 6902 【綺】 7493 【碓】〔程附〕 7509 【盆】  
7512 【盃】 7555 【餅】〔堵字附〕 7586 【蜜】 7592 【黃菜】  
7652 【編米】 7692 【鴟實】 7720 【栗刺】〔罅發附〕 7730 【胡瓜】 7739 【山芋】 7821 【孽尾】 7921 【畜】 7924 【遊牝】  
8152 【夏蟲】 8208 【紫苑】 8214 【金錢花】 8216 【萱草】  
〔標記語及び注記語を未記載〕〔七語〕  
232 【陶者】 236 【裨販】 735 【平調曲】 752 【道調曲】  
868 【史生】 886 【局】〔校書殿附出〕 6566 【駁馬】

## (3) 混種語 (漢語+和語) [一一語]

7008 【檫】心乃波之良 7313 【香輿】香乃古之

(5) 甘版本が「俗[瓦]」の語を未記載 [一一語]  
〔注記語を有し、前に別語を置く〕〔一一語〕  
201 【天探女】 252 【涉人】 461 【腕】 495 【目翳】 500  
〔吃〕 596 【膿】 6370 【庵室】 6626 【裏衣番】 7286 【圓座】

7732 【茄子「醜字附】 7816 【鷺鳥「鶴字附】 7847 【鶴子鳥】

〔二〕標記語及び注記語を未記載〔一語〕

\*廿【高麗笛】

(6)両本別注記による万葉仮名表記〔四語〕

501 【兔缺】 宇久知／以久知

※和語を「うくち」から「いくち」と書いた語形変容については、鎌倉時代の印融自筆本『塵袋』卷六にその語源を「本躰、ウクチト云フヲイクト云ヒナセリ」と解くように、「うくち」の語から「いくち」へと語形が変容していった証しじものが見えるので、此のことばの移り変わりについては改めてその補正が必要となつてゐると考えてその詳細は別稿に記載する。

6370 【庵室】「庵室／草庵」阿无之知・×／×・伊保

662 【腰鼓】「脣鼓／腰鼓」三鼓／三乃豆々美

※十巻本は二字漢字表記し、廿巻本が万葉仮名で表記する。

705 【偶人】「土偶人・木偶人」比度加太／人形

※逆に十巻本が万葉仮名表記し、廿巻本が二字漢字表記する。

535 【痔】之利乃夜万比／之利乃夜萬比  
 549 【瘡癪】「—／消渴」加知乃夜万比／加知乃也萬比  
 551 【霍乱】「霍乱／—」之利与理久智与理古久夜万比／之利與利久智與利古久夜萬比

607 【馳射】於无毛能以流／於無毛乃以流

662 【腰鼓】「脣鼓／腰鼓」三鼓／三乃豆々美

666 【筝「柱附】「—／筝」象乃古度／象乃古止

675 【簾策】比知利岐／比千利岐

677 【簾】「—／高麗笛」古末布江／古萬布江

680 【莫牟】万玖毛／萬久毛

6370 【庵室】「—／草庵」阿无之知／伊保

6432 【枢】「—／櫻」度万良／度萬良

6512 【副車】比度太万比／比度大萬比

342 【顱「觸體附】「觸體」比度加之良／比止加之良

375 【湊「拂字附】「—／拂」波奈加无／波奈加無

388 【吭】能无度布江／乃無止布江

392 【髻】沼加々美／奴加々美

454 【指】於守比／於與比

470 【踝】豆不々之／豆布々之

501 【兔缺】宇久知／以久知

525 【瘡痍】「萎俾／萎婢」比留无夜末比／比留無夜末比

526 【轉筋】古无良加倍利・加良湏奈米理／古無良加倍利・加良湏奈倍利

- 6566 【駒馬】「駒馬／—」布知無万／布知無萬
- 6571 【鼻梁】波奈美祢／波奈美禰
- 6574 【排軟肉】久良於岐止古路／久良於岐度古路
- 6575 【脊梁】世美祢／世美禰
- 6576 【承鎧肉】阿布弥湧利／阿布美須利
- 6586 【嘶【鷺附】】以奈々久・布久利豆歧／以奈々久・布久利都岐
- 6578 【汗溝】阿勢美蘼／阿世美蘇
- 6580 【尾株】「—／尾柱・尾根」乎保祢／乎保禰
- 6588 【蹄蹠】「—／疾」豆万以利／豆萬以利
- 6590 【腹瘡】多知波礼／多知波禮
- 6592 【腹轉病】波良夜无／波良夜無
- 6593 【驚】多利／太利
- 6626 【袴衣香】衣比／×
- 6924 【雲冠】万比乃加之良／萬比乃加之良
- 7025 【鐘】於保加祢／於保加禰
- 7044 【三衣匣】佐无江乃波古／佐無江乃波古
- 7057 【偶人】「—／土偶人木偶人」比度加太／人形
- 7059 【紙錢】加美勢迹／加美勢邇
- 7182 【白粉】波布迹／波布邇
- 7208 【苞苴】阿良万歧／阿良萬岐
- 7214 【剪刀】毛能多知加太奈／毛乃多知加太奈
- 7299 【簾】「大笠」於保賀散／於保賀佐
- 7355 【鞭】无遲／無遲
- 7467 【銚子】佐之奈門俗云佐湧奈門／佐之奈門俗云佐須奈倍
- 7472 【鈔鑼】沙不良／沙布羅
- 7474 【金椀】「—／椀」加奈有利／賀奈萬利
- 7509 【盆】「—／盆之缶」保度歧／保止岐
- 7554 【餉】加礼比／加禮比
- 7614 【臘】「—／■〔月+簫〕」臘／阿閑豆久利／阿閑豆久利
- 7677 【菓蓏】久多毛乃／久太毛乃
- 7720 【栗刺】〔鱗發附〕「—／栗刺」伊賀／久利乃以加
- 7730 【胡瓜】岐宇利／木宇利
- 7816 【鶯鳥】〔鵠字附〕「—／鵠」賀閑流波美／加閉流
- 7818 【卵】「—／孵」加閉流／加倍流
- 7821 【孳尾】豆流比湧／都流比
- 7828 【鷹】「—／黃鷹、撫鷹」和賀多加／和賀太加。加太加閉利
- 7847 【鶲子鳥】「—／鶲背鳥」阿止利／阿止里
- 7901 【羽】〔翥字附〕「—／翥」波都々／波豆々
- 7962 【鼯鼠】无佐々比／無佐々比
- 7989 【魚】伊乎／伊遠
- 8004 【王餘魚】加礼比／加禮比
- 8048 【鱗】伊侖古／伊呂古

- 8052 【鰐】 比札／比禮  
 8100 【甲】 古布／古不  
 8149 【寒蜩】 「一／蟻」 加牟世美／加無世美  
 8152 【夏蟲】 奈都牟之／奈豆無之  
 8346 【葫蘆】 曾久止字／曾久止久  
 8391 【竹【簾附】】 太加无良・多可波良・多計／太加無良・  
 太加波良  
 8473 【石楠草】 止比良乃岐・佐久奈无佐／止比良乃木・佐  
 久奈無佐
- (7) に示した万葉仮名の字母が十巻本と廿巻本とにおいて異なる字母を用いて表記されている箇所だけを順に排列して示した。
- 「俗」万葉仮名で表記する標記語一七九語の使用総数は、九一七字からなる。なかでも、一三字からなる語例として、551【霍乱】「瘧乱／霍乱」の「之利与理久智与理古久夜万比」がある。此の語を含めて、現代の国語辞書のひとつ、「日本国語大辞典」(以下『日国』)第一版(当該語の見出し語)には、『和名抄』の所載箇所を未載に取り扱つていて、真字体漢字(=万葉仮名)の「之利与利久智与利古久夜万比」の語例も未載となつてゐる。
- 次に長い和語としては、廿巻本だけだが九字の290【母兄】×「波良比止乃古乃加美があり、七字一語の6574【排軟肉】久良於古路／久良於岐度古路。7214【剪刀】毛能多知加太奈／毛乃多知加太奈。7512【盃】「盃器」×「之乃字豆波毛乃。と続き、六字に187【稻魂】 525【痿痺】 526【轉筋①・轉筋②】
- 535 【痔】 549【瘻瘍】 607【馳射】 658【大鼓】 886【局】  
 6924【雲冠】 7044【三衣匣】 7627【生薑】 の一一語  
 五字以上 201【天探女】 252【涉人】 342【顱】 388【吭】  
 500【屹】 533【𧈧蟲】 546【癲狂】 659【揩鼓】 662【腰鼓】  
 6279【殿】 6512【副車】 6576【承燈肉】 6584【陰脈】 6873【炬火】 6913【帛】 7085【書案】 7614【臘】 7720【栗刺】 7816【鷺鳥】 8379【=〔ヰ+阜〕莢】 8473【石楠草】 の一一語  
 四字以上 176【雷公】 188【幸魂】 276【父母】 375【湧】  
 392【鼈】 415【麁】 470【踝】 491【清血】 524【脚氣】 538【癟】  
 542【產後腹】 548【醜酒】 565【浸淫瘡】 577【蔚】 596【膿】  
 630【双六】 641【拍浮】 675【簞篋】 6279【鼈】 6370【庵室】  
 6446【闕】 6566【駒馬】 6567【鼈馬】 6570【鼈】 6571【鼻梁】  
 6578【汗溝】 6581【烏頭】 6584【陰脈】 6586【斬】 6588【蹄蹠】  
 6590【腹腫】 6591【脚病】 6592【腹轉病】 6948【裘】 7025【鐘】  
 7057【偶人】 7059【紙錢】 7060【神籬】 7071【瑞籬】 7185【黑齒】 7208【苞苴】 7299【簾】 7322【鞍轡】 7343【承鞋】  
 7467【跳子】 7474【金椀】 7542【漿】 7598【臘】 7677【菓蓏】  
 7692【鸚實】 7821【孽尾】 7828【鷹】 7962【鼯鼠】 8149【寒蜩】 8152【夏蟲】 8346【葫蘆】 8391【竹】 の五七語  
 二二字の24【霈】 256【遊女】 454【搘】 465【膝側】 471【踵】  
 477【陰囊】 478【陰核】 481【月水】 492【近日】 496【雀盲】  
 501【兔缺】 552【=〔ヰ+虎+巳〕病】 561【瘰疽】 570【贅

- 6875 【烽燧】 6990 【糸鞋】 6998 【草履】 7115 【箭】 7171 【斗】  
 7182 【白粉】 7187 【鏹子】 7302 【行纏】 7340 【簾】 7342 【轡】  
 7472 【鈔鑑】 7493 【碓】 7509 【盆】 7554 【餉】 7570 【禪鑑】  
 7571 【餚子】 7641 【稽】 7730 【胡瓜】 7732 【茄子】 7818 【卵】  
 7847 【獨子鳥】 7901 【羽】 8004 【王餘魚】 8048 【鱗】 8208 【紫  
 菴（紫蒨）】 8214 【金錢花】 の四五語

一一字の 408 【鼈臍】 543 【陰頬】 461 【腕】 562 【乳癰】

- 6370 【庵室（廿卷本のみ）】 6481 【艘】 6589 【脊瘡】 6593 【驚】  
 6615 【瑠璃】 6626 【裏衣香】 7020 【浴室】 7040 【鉢】 7047 【袈  
 緣】 7049 【衲】 7355 【鞭】 7513 【盤】 7532 【醜】 7559 【餧飮】  
 7586 【蜜】 7711 【枇杷】 7720 【栗刺】 7924 【遊牝】 7989 【魚】

8052 【鰐】 8100 【甲】 の一二五語  
 一字の 495 【目翳】 567 【癰瘡】 7888 【鶲鷺】 の一二語

となる。

此れ等の語例は『日国』第二版の見出し語として、既に立項

されていぬ」とは、新たな語解析についての検証による見直し  
 に繋がる。

その結果が「俗云」下位の万葉仮名一九五語（廿卷本一七九語、  
 十卷本一五四語）で、延べ字母数は九一七字となる。

方についても留意しながら、両本字母の異なりについても同時に考察する」とを試みた（稿末の表2を参照願いたい）。

(1) 他語に用いていない孤例の字母については囲み枠印で示し  
 たところにあり、その語例について、さらに見定めて行くこと  
 で、よりその様相が窺える。

以下、万葉仮名の字母のなかで、□印で囲った字母漢字につ  
 いては、

① 「可」字は、8391 【竹】「簾」〈多可波良／太加波良〉で、  
 廿卷本が「加」字に変改。

② 「玖」字は、680【莫牟】〈万玖毛／萬久毛〉で、廿卷本が「久」  
 字に変改。

③ 「散」字は、7299 【簾】「大笠」〈於保賀散／於保賀佐〉で、  
 廿卷本が「佐」字に変改。

④ 「侶」字は、8048 【鱗】〈伊侶古／伊呂古〉と「𠙴」の  
 字に変改。

とあって、十卷本が②「玖」③「散」④「侶」といった稀な字母を用いている。此れを廿卷本が②「久」③「佐」④「呂」の頻用度の高い字母に意識的に置換えていることが窺える。

(2) 十卷本と廿卷本のかな表記が共通する語例としては、

- ⑤ 「計」字は、7187 【鏹子】「鏹」計沿岐  
 ⑥ 「胡」字は、6589 【脊瘡】多胡  
 ⑦ 「心」字は、565【浸淫瘡】心美佐字  
 ⑧ 「爲」字は、6481 【艘】爲流

## セー

これまで十卷本をベースにして、標記語における真字体漢字の様相を窺うものであつたのだが、廿卷本での字母の用いられ

- ⑨ 「兎」字は、7559【餚飴】「麺麭」伏兎  
 ⑩ 「奴」字は、6913【帛】波久乃岐奴(392【醫】沼加々美／奴加々  
美に同じ。)

- ⑪ 「把」字は、7711【枇杷】味把  
 ⑫ 「味」字は、7711【枇杷】味把  
 ⑬ 「浮」字は、641【拍浮】於布湧  
 ⑭ 「伏」字は、7559【餚飴】「麺麭」伏兎  
 ⑮ 「篇」字は、478【陰核】篇乃古

此れ等⑤から⑯の字母を「万葉仮名」として用いる語例を見ておくと、『古事記』『日本書紀』『万葉集』などに未載の字母として⑦「心」⑯「篇」が「和名抄」には用いているといふことになる。山田孝雄博士は、狩谷祓齋『改訂箋注倭名鈔訓纂』〔川瀬一馬旧蔵、架蔵本〕のなかで、⑦「心ミサウ【浸淫瘡】二ノ七五ウ」とし、「(シン)ミサウ」の訓みを記す。⑯「ベノコ【陰核】二ノ四六オ」として、字母「篇」を「く」として用いる。此れ以外に、廿卷本だけが仮名表記とする⑯から㉙の語例を見る。次に示す。

- ⑯ 「軟」字は、8214【金錢花】「金錢」×「古無軟(40)の語をみる。廿卷本だけに見える此の字母「軟」については、これまでその検証は得られていない。言わば、此の標記語を取り上げていなかつた」とに尽きる。  
 ⑰ 「沙」字は、7472【鈔籬】沙不良や沙布羅と両本共に同じ。  
 ⑱ 「也」字は、252【遊女】「夜發」也保知や夜保知で、字母「也」

は十巻本だけに記載する。

※「俗云」下位「や」の万葉仮名表記の字母「夜」は八例（十巻本）と九例（廿巻本）となつていて、唯一、当該語「夜發」が字母「也」で表記している。廿巻本が字母「夜」に変更した語例と見る。字母「也」と「夜」は、廿巻本では、「也」一五一字、「夜」一六五字が見えていて、國郡と職官の語例を除外すると「也」八字、「夜」一二二字（標記語となつていて、複数使用の字母「夜」の語は、①「待」①「病」〔# + 庚 + 巳〕病」⑪「助鋪」④「箭」〔# + 虍 + 巳〕箭」⑤「魚梁」〔# + 乎 + 羽〕魚梁」⑥「老海鼠」〔# + 乎 + 鱗〕老海鼠」⑦「欵冬」〔# + 乎 + 選〕欵冬」⑧「寄生」〔# + 乎 + 生〕寄生」の八語に見えている。延べ語数で一二字が加えられ、一三三二字となる）と顕著な差異となつていて、字母「夜」を主流とする傾向を茲に見定める。鈴木裕也（1101111）の調査報告の天治本『新撰字鏡』での「也」一〇〇字、「夜」八字（「屋」九字）とは、真逆の字母数となつている点を報告しておく。此の事由について、大いに議論せねばなるまいが、今茲では結論づけることは保留としておくことにする。

- ⑯ 「遲」字は、7355【鞭】无遲／無遲と両本共に同じ。

- ⑳ 「蘿」字は、6578【汗溝】阿勢美蘿〔# + 古無蘿〕と扁旁逆字の字母「蘇」で記載する。

※十巻本「蘿」字を廿巻本では「蘇」字と表記し、『古事記』『日本書紀』『万葉集』の「蘇」字を用いるのに共通する（付記：室町後期写本断簡の醍醐寺本も「蘿」字で記載する）。そして、「俗云」+万葉仮名を十巻本が「俗人+万葉仮名」とする語例となつていて。

(21) 「**久飛**」字は、6535【帑誕】久**飛**於保比／久**飛**於保比で「**久飛**」(伊勢本・昌平本・高松宮本の古写本類) の字は「飛」字の省画体である。

※和語「くびおほひ」は、「和名抄」から記載がはじまり、此の語を継承するのは『字類抄』系から三巻本(久部前田本欠部→黒川本)、十巻本『伊呂波字類抄』、七巻本『世俗字類抄』と限られ、江戸時代の『書言字考節用集』へと引き継ぎが見られるといったある種の特異語の一語となつてゐる。

(22) 「**奴**」字は、392【**髻**】**沼加々美**／**奴加々美**と「**沼**」字(他

三例) を廿巻本は「**奴**」字に作く。

茲で、十巻本が逆に多く記載する字母「**沼**」を考察せねばなるまい。再度鈴木裕也(二〇一三)の『新撰字鏡』を見るに、字母「**沼**」は未記載とし、字母「**奴**」(六四例)とするからだ。

『和名抄』「俗云」対校比だけではその実態が掴め難いので字母全体で示すと、廿巻本でも字母「**沼**」(五五例、このうち四例が十巻本未載の国郡例、卷十以降のみの語五一例)、字母「**奴**」(四七例)と拮抗する。特徴としては、字母「**沼**」にあり、卷十に6397「欄額」の「**波之良沼岐**」一例、卷十二に一八例(うち標記語6917「紵布」の「**阿佐沼乃**」)は俗用の表に記載参照)、卷十三に一例、卷十四に八例、卷十五に三例、卷十六に一例、卷十七に四例、卷十八に四例、卷十九に三例、卷廿に八例となるうか。こうしたなかで、字母「**沼**」から「**奴**」への移行語例として「**ぬかがみ**」は、十巻本が字母「**沼**」を廿巻本が字母「**奴**」

とした語例となつていて、次に示す二種で『和名抄』の語訓を見てもわかるように、此の語例と258「**偷兒**」の語に限られていて、逆に標記語7674「**香菜**」7779「**蓴**」8270「**猶尾草**」8347「**薺草**」8445「**釣樟**」の五例については十巻本の字母「**奴**」で、廿巻本が「**沼**」とする点で両字母が『和名抄』のなかで同時に両用されていると見て良かろう。廿巻本が「**沼**」と切り替え表記があつて、その両用性を如実に示すものとなつてゐる。

〔前文例は十巻本**十**、後文例は廿巻本**廿**として記載して示すことにした〕

**十偷兒** 楊氏漢語抄云偷兒「**沼湏比止**上他侯反」辨色立

**成云不良人**

**廿偷兒**

世說云園中夜呵云有偷兒「他侯反」偷兒

〔**和名**奴須比止〕竊盜〔**和名**美曾加奴須比止〕一云不良人也

**十髻**

唐韻云髻「音拂沼加々美」額前髮也

**廿髻**

唐韻云髻「**払**反俗云奴加々美」額前髮也

**廿香菜**

楊氏漢語抄云香菜「音柔以奴江」一云水蘆

**廿香菜**

楊氏漢語抄云香菜「音柔以**沼**衣」一云水蘆

〔今案所出未詳〕

**十尊**

①穉敬曰尊「②視倫反④奴奈波⑤別有根々不充食」

⑥自三四月至七八月⑦通名⑧絲尊味甜臍軟霜降以後至二

月名環尊味苦臍渢者也

**廿尊** ①野王案云尊「②視倫反③和名④沼奈波」水菜也

**①蘇敬本草注云**⑥自三四月至七八月**⑦通名**⑧絲蓴味甜体

軟霜降以後至二月名環蓴味苦体涉此の「蓴」の語については、語の構造解析を試みてい、既にBAND別稿で①から⑧の数字で各々の注記語について説明する。因みに、①典拠書名。②反切。③「和名」。④万葉仮名。⑤意義注。⑥時季。⑦「通名」。⑧意義説明注となる。

※十巻本では「蘓敬曰」とするが、廿巻本では「野王案云」と典拠書名を変改させている。そして十巻本の「蘓敬曰」を意義注「水菜也」のあとに「蘇敬本草注云」と書名を加えて⑥の月の経過注記を記載する形式とする。⑦「通名」以後の⑧の意義注記は略共通する。①典拠書名、③和名を増補とし、⑤「別有根々不充食」を削ると云つたかなり大きな変改構成をなし得ている。

**十 狩尾草** 弁色立成云狗尾草「惠奴乃古久散」  
**廿 狩尾草** 辨色立成云狗尾草「惠沼能古久佐」

**十 蘭草** 陶隱居「云蘺草」「上音紅」一名遊龍「伊奴

太天】

**廿 蘭草** 陶隱居本草注云蘺草一名遊龍「蘺音紅和名伊

沼多天】

**十 鈎樟** 本少云鈎樟一名鳥樟「音章」久沼岐】

**廿 鈎樟** 本草云鈎樟一名鳥樟「音章」和名久沼木】

**十 舉樹** 本少云舉樹「久奴岐」日本紀私記云歷木

**廿 舉樹** 本草云舉樹「和名」久沼木」日本紀私記云歷木

※草木部木類という同じ分類中に二種の標記語 8445 「鈎樟」 8489 「舉

樹」を排列していて、その事由については輔仁編『本草和名』下巻

〔二ウ〕「鈎樟根皮」と「舉樹皮」の和名「柰美久奴岐」を参照にしてきたことが根元にあることを吾人が調査したなかで明らかにしている。和語「くぬき」の万葉仮名表記は十巻本が二種標記語において「沼」と「奴」とを用いていて揺れていることが見て取れる。此の揺れを廿巻本では「沼」で統べて記載する。

**十 蜈** 野王案云蛈「如說反一音稅訓毛奴久」蟬之解皮

也本草云蛇肌「名龍子衣」「倍美乃毛沼介」

**廿 蜈** 野王案蛈「始悅反音稅訓毛沼久」蟬蛇之解皮也

本草云蛇蛈「名龍子衣」「和名」「倍美乃毛奴介」

※「ぬ」の字母で、標記語「蛈」は十巻本「毛奴久」、廿巻本「毛沼久」とし、附語「蛇蛈」では、十巻本が「倍美乃毛沼介」で「沼」、廿巻本「倍美乃毛奴介」の字母に「奴」、廿巻本が「沼」と切り替え表記があつて、その両用性を如実に示すものとなつてゐる。

二字以上を以て表記する真字体漢字表記についても見定めておくところだが、敢えて茲には稽査検証を記載しなかつた。だが、特出しておくべき語について述べておくと、標記語 730 「胡瓜」の字母「木」は、十巻本が字母「歧」字で記載するのを、廿巻本では「木宇利」他二七六語に用いている。此の一連の検証が山田健三（二〇一二）が云う「分析対象の精緻観察から、仮名字母の違いが意味をもつとする解釈も生れる」への立証に繋がればと考へ、「和名抄」凡ての字母語解析については、このあとの稽査報告に譲ることにするが、抽出語解析からも両本

の字母表記について明らかにできたことは今後の字母研究に受け継いで行けることになろう。

## 八 「俗云」下位部の意義注文

「俗云」の下位部を標記語の意味説明で示す語例は総数二七例、十巻本のみ六例、廿巻本のみ八例、両本共通する一三例からなる。茲で留意すべきことは、

十巻本が「俗云」として意義説明をするのに対し、廿巻本が別用語にする…476「玉莖」7206「柈」7320「鞍」  
7491「舉」

廿巻本が「俗云」として意義説明するのに対し、十巻本が別用語にする…7555「餅」7585「乳麩」と云つた六語の異同について、茲でも一方が「俗云」としてい るのを「此間云」とする標記語「柈」／「餅」「乳麩」三語をどう見極めるかになつてくる。

同じ用語が両本それぞれにあつて、同編者の源順が意図的に置換えをなしあつたとすれば、その置換えにはある種の意図があつたことを読み解くことになる。

(1) 標記語「柈」の下位は

- 〔十〕朱漆の「鼓柈」、黒漆の「鼓柈」は是也
- 〔廿〕朱漆の「盤」、黒漆の「盤」は是也
- (2) 標記語「餅」の下位は「餅粉阿礼是也／餅粉阿禮是也」
- (3) 標記語「乳麩」の下位は「乳脯是／乳脯是也」

と孰れも下位の意義づけは略共通していることから、編者源順による両用語の差異意識を想定して良いことになり、(1)については、先ず「鼓」を付記する乃至削除すると想定し、「バン」を「柈」とそのまま用いる「盤」字に変更して説明する。

「」符号前部文言は十巻本、後部文言は廿巻本を示している。」

玉莖 俗云 鍛治訛也 燃鐵銷鑠也】／

鍛治 〈×〉冶

燒鐵銷鑠也】／

俗人 俗云或以此字為男陰以開字為女陰其說未詳】／

俗人

或以此字為男陰以開字為女陰其說未詳】／

堂 〔名附〕 ×／

壇 俗云猶堂高顯壇也出】

壇

邸家 俗云津屋此類也】停賣物取賃處也／

邸家

俗云人可謂 停壳 取賃處也「和名津屋」

邸家

俗云 町此類也】坐賣舍也／

店家

俗云 東西町是也

店家

俗云本音之濁 封土四方而高也／

壇

俗云本音之濁 封土四方而高也／

壇

俗云巾子形 所以止扇也／

概

俗云巾子形 所以止扇也／

長簷車

俗云庇刺車是乎】／俗云庇刺車是乎】

車簾

俗云車簾 車帷也／俗云車簾 車帷也

連錢駄

俗云連錢葦毛是】／俗云連錢葦毛是】

驕 〔葵附〕 俗云葦毛是 青白如葵色也／

驕

三鉢	俗云葦毛是】青白如葵色也
俗云上声之輕】／	〔俗云平聲之輕」※十卷本と廿卷本差声を異にする。
杵	俗云朱漆盤 黒漆盤 是也／
此間	俗云朱漆盤 黑漆盤 是也／
簾	俗云本音之重】收絲者也／
鞆	俗云本音之重】收糸者也
鞆	俗云有唐鞍移鞍結鞍等名】馬鞍也／
鞆	〔附〕俗 有唐鞍移鞍結鞍等名】馬鞍也
鞆	〔鞆附〕〔俗云駒鞆歟〕鞆之短也／〔俗云駒鞆歟〕鞆之短也
杏葉	俗云行衣布】／〔俗云行衣布〕
館	俗云 非甌而所炊之飯謂之鎗飯者音訛也】
櫻	小鼎也／
愚者偏見當字在旁所讀傳歟】小鼎也	今案 俗說 非甌而所炊之飯謂之鎗飯鎗音如唐是
乳麩	俗云臺是】圓案也／〔俗云臺是】圓案也
餅	俗云 中取是也】昇食器也／
餅	俗所謂中取是也】昇食器也
餅	〔痞字此間〕餅粉阿礼是也】／
餅	俗云餅粉阿禮是也】
此間	俗云乳脯是】／
此間	俗云乳脯是也】

「俗云」の用法については、新野直哉（一九八六）が此の語解釈の切り拓きを進め、「俗云」の上位部と下位部の関係を元和版で最初に取り組んでいて参照すべき点は多いにあつた。吾人は、十卷本と廿卷本の対校を許に、とりわけ下位部語例に着目して見てきた。その結果、編者源順は標記語を注解するなかで、変改させた箇所が二系統の『和名抄』を対校一覧にすることによりその特徴が明らかにできることを述べておきたい。（補助関連データ（Excel版データ）を参照願いたい。）

### 九 「俗說」六語

「俗說」<sup>(12)</sup>の用語は、廿卷本に六語（1）664「琴」「絃徽等附」。（2）6880「蚊火」。（3）7469「鎗」。（4）7572「歡喜團」。（5）7828「鷹」。（6）8083「錦貝」）に見え、十卷本では（1）（2）を欠き、（3）については、十卷本が前節でも取り上げた「俗云」に関わり、此の「俗」用語の異同についての焦点となる。（「俗說」六語の付属資料（Excel版データ）を参照願いたい。）

## (1) 「琴」の語注記

**十 琴** 「絃▼徽等附」 唐韻云琴「巨金反」樂器神農作之本五絃周文王加二絃「音与弦同古度乃乎樂有絃者皆用之」※「徽附」×

**廿 琴** 帝王世說云炎帝作五絃琴世本云神農作之琴操云伏羲作之以具宮商角徵羽至於周文王增二絃一說云文王武王各加一絃「音與弦同和名古止乃乎」文選琴賦云徽以鍾山之玉

〔今案俗說琴体有龍池鳳池龍舌龍尾蜂腰鳳足弦門絃納古人肩等名〕

十巻本では、此の語注記の末尾「樂に絃あるは皆、之れを用ゐる」を加ふといふ」とし、「周の文王が二絃」のあとに割り注「①反切②和名「古度乃乎」」としているが、廿巻本では③語意「一説云文王武王各加一絃」の一文を削り、代わつて「樂有絃皆用之」の一文を添え、さらに新たな語文を加筆記載する。「〔文選〕琴の賦に云く、徽とするに鍾山の〈之〉玉たまを以す。」として、割り注「今案るに、俗説に、琴一體に①龍一池、②鳳一池、③龍一舌、に、俗説に、琴一體に①龍一池、②鳳一池、③龍一舌、④龍一尾、⑤蜂一腰、⑥鳳一足、⑦弦一門、⑧絃一納、⑨古一人一肩等の名有り」（訓説はこれまでと同じく語解析作業のなかで筆者が便宜的に行つた。以下同じ。）を記載し、

言わば別途に整えた新たな典拠書名『文選』琴の賦を挙げて、その琴体固有の名九つを列ねた一文を記載する。茲に「俗説」の語を用いているのだが、①龍池と②鳳池は背面、

③龍舌は頭部、④龍尾は尾部、⑤蜂腰は腰部、⑥鳳足は絃を通す足部、⑦弦門は絃が通る所、⑧絃納は字の如く絃を納めるところ、⑨古人肩は肩の部となつて裝飾美の根幹を象つていて、当代の雅やかさに欠かせない重要な用語となつてゐる。

## (2) 「蚊火」の語注記

**十 蚊火** 新撰萬葉集歌云蚊遣火「加夜利比今案一云蚊火所

出未詳但俗説蚊遇煙即去仍夏日庭中熏火放煙故以名之蚊見蟲豸部

○夏草之

繁杵思者

〔蚊遣火〕之

下丹而已許曾

燃亘藝札

十巻本には当該標記語「蚊火」は未収載にする。廿巻本に「但し、俗説に、蚊か煙に遇ふ。即ち去る。仍て夏日庭中に火を熏し煙を放つ。故に以て之く名づく。「蚊か」は、〔蟲豸部〕に見える」と記載する。

## (3) 「鎗」の語注記

**十 鎗** 唐韻云鎗「音楚庚反字亦作鎗阿之奈倍或說云

〔俗云〕非甌而所炊之飯謂之鎗飯〔者音訛也〕小鼎也鎗「即

遙反」温器三足有柄也

廿鎗 唐韻云鎗「音倉字亦作鎗漢語抄云阿之奈倍今案俗說非甌而所炊之飯謂之鎗飯〔者音訛也〕小鼎也鎗「即

讀傳歟」小鼎也鎗「即遙反」温器三足有柄也

仍ち、「俗云」と「俗說」との編纂での相異にも繋がつていて、「音訛也」と説いた箇所を「鐸音如唐是愚者偏見當字在旁所讀傳歟」（「鐸」は音「唐」、是れ愚・者の偏・見の如し。）。「當」の字は旁に在り。読み傳る所か（歟）」とする。

陳州司馬孫愐『唐韻』〔龍谷大写古文庫藏〕には、「庚十二

館 楚庚切／鼎類四 鐸 俗本音當」と記載が見える。

(4) 「歡喜團」の語注記

十 欢喜團 楊氏漢語抄云歡喜團「以品甘物爲之或說云一

名團喜今案俗說梅枝桃枝飼飼桂心黏膾餌饌餚子團喜謂之八種唐菓子其有所見者已舉於上文

廿 欢喜團 楊氏漢語抄云歡喜團「以品甘物爲之或說云一

名團喜今案俗說梅枝桃枝飼飼桂心黏膾餌饌餚子團喜謂之八種唐菓子其有所見者已舉於上文

両本は共通している。此れを後の古辞書『字類抄』系が継承していく、さらに時代は降るが、校齋が『倭名類聚抄箋註』注解の引用書目の一書に挙げている『厨事類記』一二九五（永仁三）年卷下第一軸寫本〔慶應義塾大学魚菜文庫藏〕にも唐菓子八種の名が見え、その記載が見える。江戸元禄十二代所蔵者紀宗恒による書き込み部分として、『和名抄』『餌飼』（『歡喜團』）条の訓読記載が見えていて、『和名抄』の鎌倉期から江戸時代に跨るそのことばの繼承性を知る手がかりとなる。そのうえで貴重な資料の一つとなつてゐる。

(5) 「鷹」の語注記

十 鷹 廣雅云一歲名之黃鷹「音膺和賀多加」二歲名之撫「加

太加閉利」三歲名之青鷹白鷹「漢語抄云大鷹於保太加兄鷹

勢宇今案俗說雄鷹謂之光鷹雌鷹謂之火鷹也」

廿 鷹 廣雅云一歲名之黃鷹「俗云和賀太加」二歲名之撫

鷹「俗云加太加閉利」三歲名之青鷹白鷹「今案青白隨色名之俗說鷹白者不論雌雄皆名之良太賀不論青白大者皆名於保

太加小者皆名勢宇漢語抄用兄鷹二字爲名所出未詳俗說雄鷹謂之兄鷹雌鷹謂之大鷹也」

「鷹」では、「光」と「兄」の字形相似による書写となつてゐる。では、どちらが正しい名称かと考えていくとき、「雄鷹」を別名で「光鷹」というか「兄鷹」というかを検証することが必要となる。『和名抄』標記語「鷹」に十巻本卷七に「鷹 兼名苑云鶴（音瀧）一名鶴（諸延反）鷹也 野王案鷹（音遙漢語抄云波之太加 又兄鷹古能利）似鷹而小也」とあり、他資料としては「鷹詞」のなかに、「兄鷹、鶴（はいたか）兄鷹、乙鷹（おほたか）隼（さしだ）といふに定め、鷹は雌の方がいづれも大きい。「このり」は鷹の雄、「はいゑのさいたか」は「このり」の雌、「せう」は大鷹の雄、「おほたか」は「兄鷹」の雌、「雀鷹」は雄、「つみ」は「雀鷹」の雌、「さしだ」は「隼」の雄、隼は「さしだ」の雌である。また同じ鷹でも鷹飼の方では一年経たのを「ひととや」といひ、二年経たのを「片かへり」、三年経たのを「諸かへり」、四年経たのを「諸片がへり」、四年以上は單に「とやかへり」と「云う」とあつて、

廿巻本表記の「兄鷹」が正しい語になる。訓みは「せう」、「ハ」のり」とする。

(6) 「錦貝」の語注記

**十 錦貝** 弁色立成云錦貝「夜久乃斑貝今案俗說云紅螺杯  
出西海益救嶋故俗呼為益救貝」

**廿 錦貝** 辨色立成云錦貝「夜久乃斑貝今案本文未詳但俗說西海有夜久島彼島所出也」

「錦貝」では、「弁色立成」に標記語「錦貝」は、「和名」を「夜久乃斑貝」と云ふ。今案ふるに、本説に「紅螺杯」は西海の益救嶋／夜久島に有り」とし、その後の文言を「益救嶋」と「夜久島」と云つた産出する地名の表記に異同が見えていて、「益救貝」とその別表記の名「夜久貝」の語については未記載にし、ただ、「彼島に所出するなり〈也〉」と彼地からの新たな情報を得て茲に補正記載している。

此れ等六語に於いては、十巻本と廿巻本共に「俗說」の用語を用いているのは(4)「歡喜園」(5)「鷹」(6)「錦貝」の三語であり、此れに廿巻本は(1)「琴」(2)「蚊火」(3)「鎗」の語に「俗說」を用いている。ただ、(3)「鎗」には十巻本が「俗云」としていれる箇所になつてたりもする。各々の語解の詳細については、筆者まとめの『和名抄』語解分析の調査録(BAND)に掲載して公開、二〇二三年から現在進行中)を参照されたい。

その上で、二「俗用」の標記語、三「俗用」下位部注記、四

注記「今呼」と「俗呼」の標記語「專」、五「俗云」について、六「俗云」二系統本対校一覧、七「俗云」下位部真字体漢字(=万葉仮名)表記、八「俗云」下位部の意義注文言、九「俗說」

の点に細分して検証してみたが、九つの觀点のなかにも各々が輻輳している語もあり、此れ等を総合的に判断するとき、吾人は十巻本が先ず公主勤仕内親王に奏納され、内親王の管理下から離れて、その数十年の月日を重ねていく間に編者源順自身が改編増補となる廿巻本に仕立て直したと見られる幾つかの点を

兩本のデータベース対校の資料化を吾人自身整えつつあり、此のデータベースを今後さらに発展活用して、再度各々の目標に応じて、語注記内容を精査していくことが求められている。これにより語解分析での更なる精緻さを求めていくなかで、とりわけ富澤俊雅(二〇一〇)所載の『和名抄』一連のご論考は最も正鵠を射ていると見定めている。茲には名を挙げずに失礼している方々、更には新たに進めて行く志のある方々にとっての橋渡しとなるご報告としておきたい。吾人の標記語とその注記語の語解は今現在三〇〇余語となりつつあるが、今後も此の作業を日々続けていくことになる。

## 十 まとめ

已上を以て、『和名抄』の語注記「俗」について語解分析して

きた報告書とする。

実際、『和名抄』中に於ける「俗○」の記載には、茲に取り上げた「俗用」「俗呼」「俗云」「俗説」の四種の用語があり、各々連関する「此間」「今」などの用語との接点を鑑みながら見定めて行くとき、此等の用語自体が漢籍語の用例にも見えていて、その文例を茲に引用することもあるなかで、本邦使用の語例としても同じく展開を深めてきたものと見ておくことが肝要かと思う。

なかでも、「俗」の用法については、「今」や「今案」などの時間軸をより狭めて人々に説く技法などが見られ、その叙述技法は現代の吾人達の日常のなかにも受け継がれ、用いられてきたと見てている。此の「今案俗云」などの様式は、語の注記を解説するなかで、必要不可欠な一用法だったのではと考えている。

さらに、最初に示した「俗用」の様式の使用例数は『和名抄』全体から見た時さほど多くはないが、漢式和文注解にとつては欠かせない語のひとつとなっていることが見て取れる。実際、漢式和文では熟語のように記述されていても、和式訓読の表現にして見たときでは「俗に○○と用いる」との間に主目の実語を置くことでその用法を分断する用語の形態となっていることによる。このこと 자체が現代人の目には和式体の漢文表記法であって、訓読のために返読符号を添えてもまだ訓みにくくものとなってきていて、これを承けてその和らげがより必要視されてきていている。此れに拍車が懸かれば、現代語訳を用いなけれ

ば、この手の資料が全く一部の人にはしか読めないほどわかりにくいところまでできているように思えてならない。だが、何時の時代も此れに似た和文と真字文との壁を巡って、波の打ち返しがあり、かな文は真字文に変改され、真字文はかな和文に変改されると云つたよりもどしが常に繰り返されてきたことが日本語文の成り立ちのうえで、共々に影響しあってきたと考えている。その真字文の特性は、漢語に似て漢語とは異なる視覚性化の文字に依つて用いられてきている。例えば、七字に挙げた和語を「しのうつはもの」とかな表記だけで記載するのではなく、「之乃宇豆波毛乃」として見るとき、二拍目と三拍目に用いた字母「乃」表記がかな表記「の」で共通することから、準体助詞「の」と名詞「もの」の「の」であれ、「の」を「乃」字で表示することが行われていて、標記語「壺器」を明確に定めることに繋がつてたりする。ただ、此の語が廿巻本系だけに見えるものとなっていることも指摘しておかねばなるまい。

特に、「俗云」の下位語として、真字体漢字（＝万葉仮名）を用いて表現した右の一六五語の語例は、言わば此の真字体漢字を用いて精確に伝えるために成し得てきた技法用語の表象としての特徴とも言える。編者源順には、「和名」と呼称するのだが、「和字（やまとな）」としての「かな文字」表記を一切用いずに、漢式の真字（＝万葉仮名）だけで伝えようとした国風暗黒時代の真つ只中から次に移り行く時のなかで「漢風」<sup>からぶり</sup>と「国風」<sup>こくふう</sup>の結び付けが本書の編まれていくのに必要不可欠で且つ斬新性を

伴つた、濱田敦氏のことば（濱田敦一九九八・三四五頁）を借りて「云うと、標記語「鮭」の注記「今案俗用二鮭字・非也」をあげて説く「俗用漢語辞書」への歩みだしを表象して見えていることに尽きる。その万葉仮名の手法が『古事記』『日本書紀』『万葉集』『風土記』などの上代文献資料を訓みなすなかで編まれた日本語の表記法として、これが源順の同時代の『新撰万葉集<sup>15</sup>』に至るまで常用の表記法であつたのであればこそ、真名体漢字表記＝万葉仮名表記の全語の実態把握が今後も必要となる。源順自身は、その時代を代表する学識文人として、「和名」と書名を成す上で、その表記体の利用方法をどのような規範意識をもつて受け入れていたのだろうかと吾人は目を向けてみてきている。そこには源順の編者ならではの苦作の意図が窺えるのではないかと考へて、『和名抄』に見る「俗」の用法「俗云」の下位部に置く真字体漢字表記での和語を十巻本と廿巻本との二系統伝本の記載内容を以て比較対校しながら、その特徴を十分に捉えられたとは言えないのだが幾つかの調査結果を得たところにある。真字体漢字を五十音図化したとき、「和名抄」が示した「万葉仮名」がはじめて明らかになつてくることも考慮しつつ、字母から見る語例について吾人自身、「和名抄」の一部を基底とした検証報告として成し得たと考えていて。

その結果、十巻本と廿巻本の二系統『和名抄』の編纂作業の過程が十巻本撰述を先にしていて、これを増補改訂編纂した廿巻本が成立したと決定づける標記語に於ける語注記のなかで、

「俗」の用法を以て、語注記内容を対校検証したものとして茲に示すものとなつた。

今後は、『和名抄』の語注記を万葉仮名の字母だけでなく、更なる「是者」（唐代以前漢籍四九五点（三三九三語）と本邦真名資料「是」の用法）などの観点からも稽査していくことに努めていきたい。

## 注

(1) 『和名抄』の所載語数は、次の通りである。

十巻本	総数	2578 語 + 第類部 15 語 = 2593 語
廿巻本	総数	8511 語 + 国郡部 5363 語 = 3148 語

※ 555 語 両系統での差異を示す基準値となる。ただし、各々に特有標記語がある。

※ 上の総数は、あくまで二〇二三年三月時点の調査対象に基づくものであり、多少の変動が今後ありうるものと記載する。

(2) 「**さけ**【鮭】」<https://researchmap.jp/wysiwyg/file/download/44544/436833>  
(二〇二五年五月確認)

おけ【鮭】 → 【鮭】 魚名 北海道では「しやけ」と呼称するが、江戸時代の「かた」とでは、その名となる語源説明をしていて「さけ」の訓みを貫く。また、「和名抄」から平安時代後期まで標記字「鮭」と「鮭」とが揺れいで、『新撰字鏡』は「鮭」字、「和名抄」は「鮭」字と二分するなか、「字類抄」「名義抄」に両語形を記載するものの、意味上の異なりが明らかとなつていて、その表記漢字の流れは近代語国語辞書、そして、現在の国語辞書に持ち越されていく。

《語解説引用リスト》〔二〇二二年三月四日報告分〕

陽鳥（八咫鳥） 001-02° 月 001-03° 望月 001-05° 虹蜺。暈 001-06° 蛉

- 001-07° 星 001-08° 明星 001-09° 長庚 001-10° 牽牛 001-11° 織女 001-12° 牛星 001-14° 天河 001-16° 露 002-02° 露 002-07° 風 003-01° 雪 003-07° 指揮 009-11° 暖泉〔流黃附〕 010-18° 雷 016-06° 稲魂 016-17° 幸魂 016-18° 現人神 016-19° 紗。婦人 018-07° 貞 019-06° 奴僕 022-10° 婦友 022-11° 遊女 023-02° 朋友(十卷197)。鱗谷 030-07° 髮髮 033-02° 疾病。兎唇 040-16° 輛 040-30° 瘋 040-42° 照射 042-08° 無様 047-08° 曰理 094-16° 倉廬 136-21° 庫 136-22° 土藏。邸屋 136-27° 窓(十卷本)。橋 143-01° 石橋 143-02° 浮橋 143-03° 土橋 143-04° 獨染 143-05° 椅 145-10° 腰輿 146-03° 雕〔炎附〕 149-12° 金 152-01° 炀火 156-04° 煙燐 156-06° 野火 156-08° 薪 157-07° 爪 158-08° 錦 159-01° 紳 165-01° 賀鑠 169-07° 鉢 171-08° 龍眼木 172-02° 烟函 182-04° 黃櫨 184-02° 機 185-01° 織襖 185-10° 草。麻苧 185-11° 翻 186-01° 茵 188-10° 豊子 202° 銳 201° 標 203-02° 枝(飄) 203-13° 簪 204-03° 箔 204-11° 箱(筐) 205-03° 簪 205-05° 筒籬 205-10° 酒 206-01° 酒 206-06° 看 206-13° 繫 207-01° 繩餅 208-12° 粥 209-07° 藥(十卷本011-051)。山葵 214-07° 穀(五穀) 215-04° 蘿蔔 209-02° 林檎 221-19° 酸棗 221-26° 烏芋 224-06° 大凝菜(心太) 226-13° 鹿尾菜 226-15° 茄 228-09° 牛蒡 229-13° 鬼皂莢 229-14° 雪雀 231-46° 鶴 231-61° 猫 234-21° 猫 234-22° 麻鼠 234-35° 鼠(土竈) 234-37° 鱗魚 236-26° 河豚。■魚(黒鯛) 236-18° ■魚(臘) 236-28° 鱗 238-01° 蚊蟬 240-19木。欵冬 242-14° 蒲公草 242-54° 烏草樹 248-64° 及日 242-97° 互添 242-131° 紫 243-01° 藤 245-02° 竹(簾) 246-01° 楊 248-14° 枝條 249-03°。
- (3) 「分毫字様」については筆者が纏めた資料以外にも、『千禄字書』『五經文字』〔敦煌出土S388字様〕などによる正俗字の考察がなされ、〔正字〕が、
- 〔所謂正者〕竝有憑據、可以施著述文章對策碑碣、將為允當〈進士考試理宜必遵正體、明經對策貴合經注本文、碑書多作八分任別詢舊則〉(千禄、序文) 訳文: 所謂「正」とは、拠所があつて、著述・文章・

官吏登用試験の答案・石碑に用いるべき字形〈以下略す〉」

であつて、軽て本邦古辞書類にも「字類抄」そして室町時代の「下學集」「節用集」類にその継承が見られるものとなつてゐる。また「俗字」を主旨的にした「世俗字類抄」や江戸期になると「俗字類聚」「筆海俗字指南車」と云う書名に「俗字」の用語を標目にした字書類が編纂されてしまつてゐる。

(4) 『爾雅翼』〔南宋の羅願撰〕四庫全書本を参照。

(5) 資料『日本紀私記』(田氏私記、延喜講筵(九〇四～九〇六)以前に成る)について、西宮一民(一九六九)を参照した。影印資料は、早稲田大学図書館蔵を用いた。

(6) 【專】字の和訓「わはら」については、上代『万葉集』『風土記』他資料にも和訓「わはら」は未収載の語で、最古の語例は、正倉院聖語藏本『大乘大集地藏十輪經』卷七、元慶七(八八二)年訓点(中田祝夫一九七九:一二四頁35行)に、

【原文】我說是人不護三業專行惡行妄号大乘實於三乘皆非法器

【翻刻】我レ【説】是の人は三業を護(ラ)不、専ラ惡行を行ひて、妄て大乗と号して、実に三乘に「於て、皆、法器に非ず」と説ク。

※他に同書卷九「モハラ」の訓ありとする。

とする。十巻本『和名抄』成立の九三四(承平四)年以前の例と成つてゐる。更に、文学資料については、和語「わはら」の語は上代『万葉集』には無く、平安朝作品では『古今集』一例、『竹取物語』一例、『伊勢物語』一例、『土左日記』一例、『蜻蛉日記』一例、『落葉物語』三例、『宇津保物語』二例(一一〇一・一二九〇)、『源氏物語』五例となつていて、当に平安朝時代語の一例に算える。

(7) 『和名抄』に於ける「此間云」の用語は、総数八四例(十巻本のみ二六例、廿巻本のみ八例)が見えていて両本共に用いられる語数は五〇例に及ぶ。残り三四例のなかで、「此間云」を「世間云」に置き換えたのが八例、次に「俗云」が「一餅〔殆字附〕2乳餅3蜜4黄菜5遊牝6旃檀7蘿枋」の七例あり、その一例が此の「旃檀」の語となる。此の逆もあつて、廿

巻本が「此間云」に対し、十巻本が「俗云」とする「1圓座2枇杷3蒴蘆」の三例も確認している。

(8) 「十三字母」の語例として、他に標記語「炙歎」に「字流之奴利乃夜岐之留乃都奉」がある（小学館『日国』第二版には、同じく未収載の語となっている）。

(9) 山田孝雄博士著『倭名類聚鈔考證附録／改訂笺注倭名鈔訓纂』合一冊「川瀬一馬旧藏・架蔵本」は、国文学研究資料館「川瀬一馬蔵書」にも同一刷り本が蔵書されていて、所蔵者川瀬氏の書き込みのない資料であることを確認している。架蔵の書には合の前末に「板齋自筆稿本／本書の原本今家藏す、安田一氏より所惠古辞書研究資料の一なり、昭和十五年六月／川瀬一馬朱印」があり、原本家藏とあるが、板齋翁手稿本（大槻文彦博士藏）を贋写し整理した（大正八年二月十八日原本贋写同四月十日書之了／山田孝雄）資料は、現在、国文学研究資料館からも未確認にある。

(10) 「金錢花」廿巻本の語注記に、「金錢は俗に古無軟と云ふ」（訓説で示すと「コムゼン」で「ン」を無表記し「コムゼ」とも見るか）と記載を見る。茲で、真名体漢字表記（＝万葉仮名）「古無軟」をこれまで検証されずにきていると一言した。「和名」という用語を用いずに「俗に〇〇と云ふ」形式として記載する点を考慮しておきたい。また、小学館『日国』第二版の当該語の見出し語、「補遺」此れに【古辞書】と【表記】の欄からは、「和名抄」を示す「和名」の語が漏れていることを指摘しておきたい。そのうえで、万葉仮名「古無軟」の語例を考察しておくと、現行国語辞書の標記語「金錢」ではなく、見出し語「コンゼン」で、廿巻本「和名抄」から当該語を引用し、意義説明に植物名「コンゼン」で、廿巻本「和名抄」から当該語を引用し、意義説明に植物名とし、後の古辞書の観智院本「類聚名義抄」（艸部八一・僧上五2）や江戸時代の『和漢三才図会』巻九四濕草（5ウ）が再度此の訓を所載する。

俗用「古無軟」の語例となる。單字「金」を「古無」と二拍で単漢字「金」吳音「コン」、「軟」吳音「ネン」、漢音「ゼン」で、慣用音「ナン」なの

で「古無軟」の語は吳音と漢音の混淆音「コムゼンクワ」（平安末の「字類抄」（前田本）の注記訓には「俗」と下位部に添えていて「コムゼンクワ」平・上・上・上・上・上）（巻下古部植物門二ウ（二五〇頁）3）とカナ訓表記で所載する）となつていて、「万葉仮名」として、「難」字が「万葉集」卷第一・五七八番「左散難弥乃」に「難」や「奈伎和多里南牟」の「南」が用いられているように、当該字「軟」は漢音「ゼン」であり、字母として本書でも孤例のものとなつていて。ある意味で、「古無軟」の語は別に参考した証例を見出せない限り、源順自身が「金錢」に選択した字母「軟」字と見ておくことになる。高田智和・矢田勉・斎藤達哉（二〇一五）にも未収載の「せ（ゼ）」字母例として見定めておく。

また、山田孝雄（一九七〇：二八七頁）が示したように、「和名抄」草木部には、「芭蕉」「發勢乎波」「地黃」「蒴蘆」「曾久止久」「烏頭」「附子」「旃檀」旃檀「俗云善短」「紫檀」「白檀」「蘿蔔」「枸杞」「櫻櫛」「木欒子」「無久禮邇之乃木」「木瓜」「毛介」「石榴花」「俗云佐久奈無差」「木蘭」「和名無久良邇」「檳榔子」「此間戛朗」と漢語例も多く、此等は「本草和名」との連関性に繋がっている。

(11) 鈴木裕也（二〇一三）表一「天治本『新撰字鏡』における仮名の字母

（五頁上段参照）に照らし併せて見ておくことができる。とりわけ、「俗云」を用いない「し」のなかで、「之」以外の頻用度の高い「志」（廿巻本四三語）、低い「自」（廿巻本一例）の字母が裏付けられ、さ部では「散」字は「字鏡」には見えず、替わって「字鏡」の字母「作」字五例は「和名抄」には未載となつていていることを補足しておく。

(12) 源順『和名抄』両本共通の三語に用いられる「俗説」の用語は、同時代の『作文大体』（一一〇八（天仁元）年頃か）に、「第十俗説 凡俗説者世俗所伝之説也」と云う記載が見え、當時衆知のことがらとして取り扱うときの用語となつていたことが分かる。

(13) 「厨事類記」此書巻末に「右厨事類記上下御厨所預左馬權助／紀宗長自筆也／紙一枚破損畢殘文為秘記必不可及／元禄七年春三月書之

／御厨子所預備前守紀宗恒〔花押〕／四十八歳時（1634–1706）六十七歳」と與書きする。此が日本料理四条流宗家九代の石井泰次郎の所蔵となつていたのを料理研究家田村魚菜氏が取得し、此れを慶應大学魚菜文庫に収められている。

(14) 「鷹詞」〔蒙求臂鷹往來〕一冊〔宮内庁書陵部藏〕や『箸鷹文字抄』〔鷹秘抄〕〔立命館大学図書館藏〕に「兄鷹」と記載が見える（福井久藏（一九四〇）を参照）。

(15) 〔新撰万葉集〕〔天理図書館藏〕では、「春丹成須由裳」「露丹懸礼留身丹許曾佐里藝礼」「錦裁服許々知許曾為礼」と一部分万葉仮名表記とする。

中田祝夫（一九七九）『東大寺諷誦文稿の国語學的研究』影印翻刻。東京：風間書房。

永山勇（一九六三）『国語意識史の研究』東京：風間書房。

新野直哉（一九八六）「和名類聚抄」の「俗云」の性格——「A俗云B」の場合について」『文芸研究』一一：五三—六八。

西宮一民（一九六九）『和名抄所引「日本紀私記」』『皇學館大学紀要』七：一—一六。（本稿は一九七七年刊『日本上代の文章と表記』東京：風間書房、三〇六—三一五頁によつた。）

萩原義雄『和名抄』語解釈の調査録（『和名類聚抄』から『倭名類聚鈔箋注』）〔BAND・情報言語学研究室 Gocm〕<https://band.us/band/93621298/>

に掲載して現在公開中。（二〇二三—現在維持中。二〇二五年五月確認）

濱田敦（一九九八）『日本語の史的研究』京都：臨川書店。

福井久藏（一九四〇）「鷹詞に就きて」『言語研究』六：一—一三。日本言語学会。

不破浩子（一九八八）『箋注倭名類聚鈔』について『贋写版、第一冊。私

家製本。（本稿では、複製による一九九一増刊を参照した。）

馬淵和夫（一九七三）『和名類聚抄古写本・声点本文および索引』東京：風間書房。

池田証壽（一九八八）「カシコ（彼間）」と「ココ（此間）」：因明大疏抄に

見える肝心記の佚文」『国語学』一五五：三三一—四四。

大友信一・江口泰生（一九八六）『和名類聚抄』の正・俗・通』佐藤喜代治（編）『国語論究』第一集。東京：明治書院。

鈴木裕也（一〇二三）「新撰字鏡」天寶本と抄録本祖本の先後関係について—仮名の異同と改変から」『訓点語と訓点資料』一五〇：一—二一。

高田智和・矢田勉・斎藤達哉（二〇一五）「変体仮名のこれまでとこれから／情報交換のための標準化」『情報管理』五八（六）：四三八—四四六。<https://doi.org/10.1241/johokanji.58.438>

宮澤俊雅（一九九四）『和名類聚抄の「此間」について』『国語国文研究』九五：一—一六。（宮澤俊雅（一〇一〇）に再録。）

宮澤俊雅（11010）『倭名類聚抄諸本の研究』東京・勉誠出版。

山田健三（11011）「書評 宮澤俊雅著『倭名類聚抄諸本の研究』」『日本語の研究』八（1）：一一一～一二九。

山田孝雄（1940）『國語の中に於ける漢語の研究』東京・宝文館。（本文稿は一九七〇年の復刻版によつた。）

山田孝雄『倭名類聚抄考證附録／改訂箋注倭名鈔訓纂』合一冊、川瀬一馬旧藏・架蔵和綴本。

## 追記

『和名抄』所載の「俗語」総数一〇例（十巻本七例、廿巻本一〇例）について補足する。

6538【特牛】 6588【油▽擣押】 6891【烟▽燐】 7213【模】 7293【藝器】

7516【甄】 \*廿【袴奴】 7534【酣酒】 7732【茄子】 7816【鷺鳥▽鵠】

※茲に見える俗語については「世俗語」「通俗語」を意味してゐる考へ、和語「( )とひ」「しるむ」「けむたし」「かたき」「おほいほ」「つきのはた」「そひ」「ゑくし」「かへる」と云ふた和語について個々に考察する必要がある。その詳細については、researchmap (<https://researchmap.jp/HagiwaraYoshio>) に別稿として掲載する予定である。

## 付記

本稿（の一部）は、人間文化研究機構の異分野融合による総合書物学の拡張的研究国語研ユニット「古辞書類に基づく語彙資源の拡張と語彙・表記の史的変遷」（プロジェクトリーダー：高田智和）の研究成果である。

表1 「和名抄」「俗用」廿卷本と十卷本（総数六一語）の一覽語数表

## 附表

合計																通番	分類	
	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
	草木	×	×	鱗介	羽族	菜蔬	菓蓏	飲食	器皿	調度	布帛	香藥	船	居廁	音樂	術藝	人倫	廿数
56	5	0	0	6	1	10	3	3	4	11	2	0	2	3	3	2	1	1
53	3	1	4	2	1	8	4	3	3	10	2	1	2	1	3	2	3	3
61		蟲豸	龜貝	龍魚									船車					十類
	千歲蘿。筒。篠。黑柿。杉。	夏蟲。																標記語
																		髫髮。負。邊鄙。
																		的。插頭花。
																		鞶鼓。琵琶。「撥附」。日本琴。
																		倉廩。「檄字附」。籜子。十字。
																		青木香。
																		白糸布。紵布。
																		墨。「挺字附」。髮。澤。嚴器。匣。盥。紅藍。第。步障。幃。檜楚。
																		鋟。匣。盥。籜。
																		薑。雉脯。未醬。
																		熟瓜。胡瓜。芋。「耽附」。薜。
																		海藻。「滑海藻」。「末附」。海松。陟釐。神仙菜。紫菜。海蘿。大凝菜。辛菜。菖。
																		鴟。
																		鰯。鮭。河貝子。海蛸子。老海鼠。蝙蝠。

※右線を施した標記語は、廿卷本のみに「俗用」表示があり、十卷本が「用」「此間」や無表記とする語を示し、逆に左線を施した標記語は、十卷本のみに「俗用」表示があり、廿卷本が「俗云」「俗人」や無表記とする語を示した。

表2 「俗云」万葉仮名字母数表（十巻本『和名抄』廿巻本による欠語箇所を補記）

な				た				さ				か				あ	
	奈			多	太			沙	佐	可	賀	加		阿	字		
	21			8	24			1	24	1	10	50		21	数		
	に			ち				し			き		い				
	迹			遅	智	知		之		枳	岐	伊	以	字			
	5			1	5	21		35		1	30	6	11	数			
	ぬ			つ				す			く		う				
	沼			津	豆			須	玖	俱	久		宇	字			
	3			1	18			17	1	1	38		19	数			
	ね			て				せ			け		え				
	祢			手	天			世	勢		計	介	江	衣	字		
	4			1	2			3	4		1	3	2	4	数		
	の			と				そ			こ		お				
能	乃	兎	土	都	止	度		蘿	曾	胡	古		於	字			
9	32	1	1	9	10	11		1	9	1	17		14	数			
							ゼン	セン	シン	ジヤウ	サン	サン		ギヤウ		字音	
							軟	錢	心	常	散	三		行		字	
							1	1	1	1	2	3		1		数	



表3 『和名抄』十巻本と廿巻本「ぬ」の字母「沼」と「奴」収載表

	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	通番
計	卷十	卷九	卷八		卷七	卷六		卷五	卷四	卷三	欠	欠	欠	欠	欠		卷二		卷一	卷十
45	5	1	3		4	6		4	10	10							1		1	沼
19	3	4	1		2	3		0	2	1							1		2	奴
計	卷廿	卷十九	卷十八	卷十七	卷十六	卷十五	卷十四	卷十三	卷十二	卷十	卷九	卷八	卷七	卷六	卷五	×	卷三	卷二	卷一	卷廿
51	8	3	4	4	1	3	8	1	18	1										沼
47	0	1	2	1	0	0	1	0	3	0	2	4	10	8	10		2	2	1	奴

## Use of the Word “Zoku: 俗” in the Explanatory Notes of the *Wamyō-ruijushō* 『倭名類聚抄』

HAGIHARA Yoshiro

Honorary Professor, Komazawa University / Project Collaborator, NINJAL

### Abstract

This study examines the word “Zoku: 俗” and its usage in Japan’s historical dictionary, *Wamyō-ruijushō*: 『倭名類聚抄』 (often abbreviated as *Wamyōshō* 『和名抄』). Initially, 「俗」 has been researched in explanatory notes, particularly in Chinese-character texts within Buddhist writings, such as those compiled China. Japanese scholars have also used 「俗」 as “Sezoku: 世俗字” or “Tsuuzoku: 通俗字”. Many early Japanese researchers have considered it as a legitimate word in the old dictionary and made it publicly available. Regarding the word 「俗」 compiled by Shitago MINAMOTO: 源順 in the Heian period, its traditional evolution will be clarified by examining the content of each heading-word’s notes.

The data include 10 volumes—①馬淵和夫影印諸写本（風間書房刊）: Kazuo MABUCHI, Manuscript-photo-book, Kazama-shobo, ②狩谷被斎『倭名類聚抄訂本』（内閣文庫蔵）: Ekisai KARIYA, Revised *Wamyō ruijushō*, Cabinet Bunko—and 20 volumes—③那波道圓編纂元和版（古写本類）: edit. Doen NAWA’s old manuscript from the “Genna” period—, and these data will be analyzed to clarify the overall meaning of the word 「俗」 and to prepare interscholastic tables based on each heading word. Understanding its traditional usage is crucial for researchers. Main words were researched in present-remaining books, defining each usage of 「俗」 also involved referencing old Japanese dictionaries such as *Jiruishō* 『字類抄』 or *Myōgishō* 『名義抄』. Each completed paper was made public, aiming to contribute to the continued scholarly use of historical dictionaries.

**Keywords:** old Japanese dictionary, “Zoku: 俗”, Heian period